

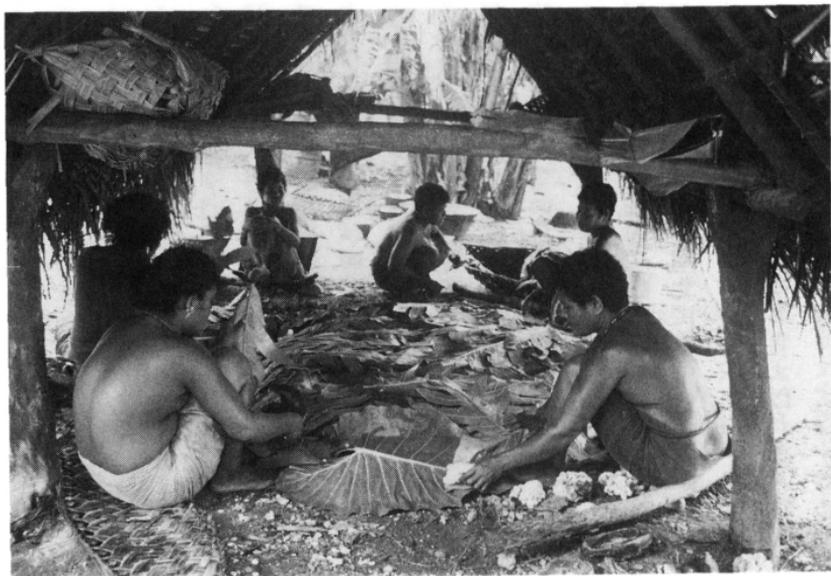
# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## 母系社会の構造：サンゴ礁の島々の民族誌

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2017-03-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 須藤, 健一 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/00008405">http://hdl.handle.net/10502/00008405</a>

第I部  
母系社会に生きる



炊事小屋での石蒸し料理づくり

## 1 母系家族の生活

「寄って食べてゆきなさい」。もうもうと煙がたちこめる差しかけ小屋から女たちの声がかかる。昼下り、女たちはその小屋のそばをとおる人を、だれかれとなく呼びとめる。声の方を見ると大勢の女たちが忙しく手を動かしている。ココヤシの葉でふいたその小屋はマヌーム、つまり炊事小屋である。そのまわりで、タロイモの皮をむく人、ココヤシの果肉を削る人、水を運ぶ人、そして地面を掘った炉のなかで燃えているたき木に小石を掛ける人。水と小石運びは少女の役である。十人あまりの女たちは子どもを叱りつけたり、にぎやかな話し声をたてて料理づくりにはげんでいる。まだ食べものができてなくても、女たちは声をかける。

サタワルには九十軒の家がある。島の南よりの西海岸に沿って家は並んでいる。中央部にトタン屋根の教会と共同売店が建っており、家々と海岸のあいだに一本の道がある。南北に六百メートルはあろうか。島の西側に人が住むのは北東の貿易風を避けるためである。家は、ココヤシの木立の中に広場を囲むように十軒、六軒とまとまっている。このひとまとまりの家の空間はプッコスとよばれる。ほぼ、三百坪の屋敷である。島の人びとは十五のプッコスに分かれ住んでいるが、各プッコスには一つの共同炊



ココヤシの葉葺きの家

事小屋がある。プウコスに住み、料理づくりをともしする女たちは、「母系の血筋」を同じくしている。つまり、母系一族の女性である。女たちは先祖伝来のタロイモ田を分けあい、イモをつくり、収穫するのをもっとも大事な仕事になる。

島社会ではその母系一族が屋敷（プウコス）をはじめ、タロイモ田、ココヤシ林、パンノキなどの土地や財産を所有している。このように、一人の女性祖先を共有し、母系の系譜（出自）をたどれる人びとよりなる集団を、「母系出自集団」とか、「母系リニージ」とよんでいる。サタワル社会では妻方居住、つまり婿入り婚を行う。屋敷に住んで日常生活を営む人びとは、母系リニージの女性たちとその夫たち、彼らの子どもたちで、そのほかに養子がくわわる。リニージの男性たちはその妻のもとで暮すので、この屋敷にはいない。これがサタワルの母系（拡大）家族である。家の海岸よりの砂浜には切妻屋根の大きな建物が八軒建っている。ウートとよばれるカヌー小屋である。この建物はカヌーを入れるだけでなく、男の集会所や作業所、单身男性やよその島からの客人の宿泊所となる。また、男たちが無人島や遠くの漁場へカヌーで出漁するときには、家で寝ずにここで夜をすごす。出漁前夜、妻と寝ることはタブーになっているからだ。男たちが漁から帰るとまず漁獲をここに集めて分配する。魚とりやココヤシの手

入れなどの仕事がないとき、男たちはカヌー小屋にやってきて漁具やカヌーの修理をする。カヌー小屋は男たちが生産活動に従事しないときのたまり場にもなっているのである。そこにはふつう女たちは入れない。

## 女の一日

島のなかほどにナティクの屋敷（プッコス）がある。ナティクは柔和な顔つきをした小柄な老女である。白髪がまじり、七十五歳になるという。これまでに三度の結婚をし、三人めの夫と死別してから十年になる。三人の息子と三人の娘を生み育ててきた。すでに十二人の孫と五人のひ孫がいる。彼女は自分の娘夫婦、孫娘夫婦とそれらの子どものほか、二人の妹とその娘や孫たちと一つの屋敷に暮している。家族の総勢は、娘や姪の夫たち、それに養子をくわえると四十人である。この屋敷には七軒の家があり、人びとは夫婦ごとに分かれ住んでいる。ナティクは末息子のマイク、姪のアナクと孫娘のロースといっしょだ。マイクは十八歳の高校生である。アナクはナティクの弟の娘で十六歳になる。彼女の父はウルシー環礁にいる。母がその島の出身だからである。彼女は、六歳のときにナティクのもとへきた。ロースはナティクの息子の子で四歳。彼女の父もほかの島にいる。二人ともナティクの養女である。

サタワルの母系家族には、アナクやロースのように一族の男性成員の子どもが多くふくまれている。それは子どもが父親にかわって、父方の祖母やオバと生活するためだという。ナティクは自分の子どもを育てあげてからでも、他人の子どもをひきとるのがサタワルの女の生きがいだと話す。「楽隠居」の

歳ごろなのにと思うが、からだが動くうちは娘や孫の世話にはならないと言いはる。彼女はこの母系家族の最年長の女性で、「女性族長」をつとめる。女性家族員にタロイモ田の割りあて、毎日の仕事の段どり、食べものの分配、島の行事への参加などについて指図する立場にある。

#### タロイモと料理

膝の具合が悪いナティクは、空が白みはじめる六時にはアナクとロースを起こして海に行く。波静かな西側の礁湖が女たちの水浴び場になっている。家に帰り身体にタンクの雨水をかけたあとヤシ油を塗る。腰布をとりかえてから教会におもむく。島の女たちと一時間ほどの礼拝をすませる。朝食のかわりに昨夜の夕食の残りものを口にして妹やその娘たちと山刀を手にタロイモ田へ出かける。収穫にあたるのは九人の女たちである。田は森の湿地にあり、歩いて三十分かかる。ナティクは四区画、二百坪のタロイモ田をもっている。二区画は先祖伝来、ほかは亡くなった夫からもらったものである。妹や娘たちのもち分もほぼ同じ面積である。一族の田を全部あわせても三反歩にすぎない。

各人がそれぞれの田からどれだけのイモを収穫するかは、昨日のうちに伝えてある。彼女は自分の田に入りイモを掘り起し、イモを茎から切り離してかごにつめる。畝を作り直したあと茎を土中に植えて、八ヶ月後にふたたび収穫できるようにしておく。孫娘のロースにはタロイモの植えかたを教える。アナクはすでに植えつけてあるイモ田に入り、除草、畝への土かけなどをひとりでする。炎天下での仕事はのどがかわき、腹もすく。近くを少年が通りかかると、自分のヤシの木に登らせて、若いココヤシの実をとらせる。その実の果汁と果肉が昼食だ。午後二時ころに、妹たちの作業もほぼ終わっているのを確



タロイモの収穫

かめ、家へ帰る。アナクにイモの入ったカゴをかつがせ、途中でヤシ林に落ちていたココヤシの実や薪を拾い集める。家近くの池で水浴びをし身体についた泥を落とす。三時すぎに家に着くと料理づくりにとりかかる。

家族の女たちは、掘り起したタロイモをナテイクの家の側にある炊事小屋（マヌーム）に持ち寄る。全部で七かご、拳ほどのイモが三百個。アナクをはじめ女の子たちは地炉（ウーム）に薪を入れ、その上に小石をかぶせて火をつける。一時間もすると焼石ができる。ナテイクは妹や娘たちとイモの皮をむき、刻んで大きな鍋に入れる。鍋を地炉の上におき、イモが煮あがるあいだにコブラ（成熟したココヤシの果肉）を削る。イモが煮えるとアナクと若い孫娘たちが、それを石杵でつく。石杵をうちおろすには力がある。女たちのにぎやかな話し声と、カーン、カーンという杵の音があちこちのマヌームから聞こえる。そのころには男たちがとった魚も届く。魚を焼く臭いもあたりにも充滿する。イモの団子ができあがる。その団子に甘みのあるコブラミルクをかけたものが夕食になる。イモは煮ただけでも食べられるが団子料理が御馳走だ。

ナテイクは、イモ団子と魚を家族の人びとに分配する。食事は夫婦とその子どもごとく家にする。彼女は婿に出ている弟や息子たちのところにもその料理を一皿ずつ届けさせる。彼女たちが収穫したもの

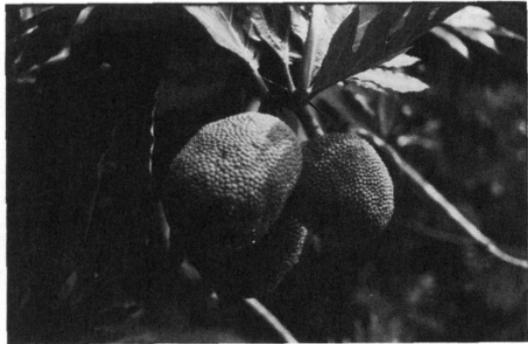


戸外で食事をするナティク

は、一族の男性成員とともに食べるのが島の習慣だ。夕方になると、少女たちが頭に皿をのせてあちこちの家へ出向いていく。ナティクが水浴びののち教会でお祈りをすませ、アナクとロースとともに夕食を食べるのは太陽が沈む七時ころ。家の外にゴザを敷き手づかみでイモや魚を口に運ぶ。隣では孫娘のネラク夫婦が子どもたちと食事をしている。九時ころには家に入る。土間にタコノキの葉のマットを敷き、蚊帳をはってからランプの火を落とし横になる。

#### パンノキの実

タロイモ田の作業は、十月から三月にかけて一週間に三度ぐらいの割で行う。一回に二日分のイモを収穫する。パンノキが実(パン果)をつける四月から九月にかけては、その実が主食になる。その時期、パン果の収穫が忙しくタロイモ田へ行くのは週に一度と少ない。パン果を採取するのは若い女性とその夫や独身の男たちの仕事だ。ナティクはパン果の成熟具合をみて、アナクや孫娘のネラクにパン果をとる木を指示する。男たちは高いパンノキに登り、枝先の熟したパン果を竹棹でもぎ落とす。木の下でそれを拾うのは、若い女性の役目。アナクは落ちたパン果を数え、百個になると木の上の男たちに合図する。それだけあれば十分。パンノキは植えてから五年で実がなる。樹高三十メートルの木は二百個もの実をつける。パン果は一個で成人一人の一



成人の頭ほどのパン果

日分の食糧になる。ナティク一族は百十五本のパンノキをもっている。パン果が実る時期は海も穏やかで、島の男たちは酋長の指揮のもと、総出で魚とりに出かける日が多くなる。この共同漁の日、男たちは早朝にパン果を落とし、ココヤシの実だけをもって漁に出る。午後三時、漁から帰る。その日、女たちは朝から料理づくりにとりかかる。地炉でパン果を焼き、皮をむき、石杵でつく。焼きあがったパン果は甘みがあり、「蒸しパン」の舌ざわりがするおいしい食べものだ。その昔、西欧の船乗りたちが、太平洋の島じまで口にしたパン果を「ブレット・フルーツ」と名づけたというのはもったもなことである。それをつくと「餅」になる。日本時代から「パン餅」とよばれている。

男たちが漁から帰るまでに食べものを用意しておかないと、彼らから「女たちは怠けものだ」と言われる。女たちは家族ごとに食事をつくり、夫や息子たちのカヌー小屋に届ける。男たちはとった魚を一軒のカヌー小屋に集める。酋長はそのなかから数匹の魚を分け前として男たちに配る。男たちはそれをカヌー小屋で焼き、女たちのつくった料理で共食する。漁獲は男の腕によってまちまちである。しかし、魚の多寡は問題ではない。男たちがとった魚は赤ん坊から老人にいたるまで均等に分配される。パン果のなる半年のあいだ、サタワルの人びとはありあまるほどの陸と海の幸に恵まれ、飽食の日々をおくることのできる。

パン果の時期に、女たちはマールとよばれる貯蔵パン果をつくる。マールはパン果を土中に埋め発酵

させた保存食である。六月から八月がマールづくりの最盛期。女たち総出で三日を費す。六百個くらいのパン果を一度に収穫し、皮をむき、芯をとり、小片に切り刻む。それをバナナやタコノキの葉を敷きつめた直径一メートル、深さ二メートルの穴に埋める。一つの穴には二千個ものパン果を貯蔵する。ナティクの家族は三つの貯蔵穴をもっている。森のなかで蚊やハエを払いよけての作業は骨がおれる。マールづくりの日を決め、パン果を穴に踏みこむのはナティクの責任。彼女が上手に発酵させる方法をよく知っているからである。発酵の具合が悪いと腐ってしまう。ときどき穴のおおいをとり、上下のマールをおきかえる。それは三ヶ月もたつと食用にできる。マールは水洗いののち石蒸し料理にして食べる。「ちまき」と同じ味がする。それはパン果の枯渇期にタロイモの主食を補う重要な食糧となる。

#### 技術と知識の伝承

タロイモやパン果の採取がない日でも、ナティクは身体を休めない。腰布を織り、タコノキやココヤシの葉でマットやかごなどを編む。一族の女たちも腰布を織る。地機で一枚の腰布をしあげるのに十日はかかる。腰布は自分が身につけるだけでなく、他島への交易品として貴重である。また、息子たちが島の秩序を乱したときには、賠償の代として酋長に納めるし、ほかの一族（リニージ）で死者が出たら「香典」として贈る。家族でつねに、五十枚はためておかなければならない。彼女はまた、若い孫娘に布の織りかたを教える。ハイビスカスやバナナの内皮で糸を紡ぎ、その糸を染色してから整経し、機を織る工程についてである。

ナティクは、アナクやロースに島の女として必要な技術を教えるだけでなく、一族の秘密の話伝授

する。一族の起源（移住）伝説、祖先からの系譜や土地の伝承、タロイモの豊穡儀礼、占いなど代々うけつがれてきた話である。それは女だけの秘儀的知識となっている。ラピトとよばれる一族の移住伝説と祖先からの系譜伝承はとくに重要である。それらは、この社会における一族の序列を裏づける話であるから。彼女は夜に娘や孫娘なども家によんでその話を聞かせる。土地の境界や土地の移譲についての伝承も、一族の食料資源を保持するうえで大事な知識となる。どの土地が祖先伝来の財産であり、どの土地が他の一族に譲渡したものであるかといった内容である。土地を譲渡した祖先の名前と系譜関係を知らない、土地係争の問題が生じたときに、相手にその土地をとられてしまう。

ナティクは自分の家族成員のことだけでなく、婚出している息子や孫に子どもが生まれたとか、彼らが病気になったと知るとその家を訪れる。新生児につきっきりで水浴びをさせたり、息子の嫁の食べものをつくるために動きまわる。他島に住んでいる息子や孫が病気になったと聞けば、島にいる息子や甥にカヌーを出すように命令する。見舞の品々（腰布、マット、米、缶づめなど）をカヌーに積みこみ彼女もいっしょに航海に出かける。二〇三〇キロメートル離れた島への旅でも、気やすくカヌーに乗りこむ。ナティクの父は著名な航海者であった。他島出身の父をもった彼女は、幼いときから父の島に兄弟たちとカヌーでよく連れられて行った。弟のルツパンは、二度にわたり日本へのカヌー航海を成功させている。彼女自身も星のこと、波のこと、風のことなど、男の航海者に負けないほどの知識を身につけている。有能な航海者である息子のイキチュエは今でも、雷と稲妻で天候を予測する方法をナティクのところに習いにくる。

女性族長としてのナティクがもつとも気をつかうのは、一族の男たち（息子、甥、孫など）が彼らの



カヌーの上で食事をするナティク

子どもたちにタロイモ田、パンノキ、ヤシ林を贈りたいと言うときである。母系社会ではあるが、サタルでは父親が子どもに財産の一部を相続させる習慣がある。ナティクは一族の財産の運営と管理をまかされている。男たちにしてみれば、妻の一族の手前、一本でも多くのココヤシを自分の子どもに贈っていい顔をした。しかし、彼らの要求をそのまま聞いては一族の祖先伝来の財が少なくなり、家族の食糧をまかなえない。そこで、彼女は族長のヌグトに頼んで一族の会議を開いてもらう。ヌグトはナティクの一番上の兄にあたる。一族の男たちがナティクの家に集まる。彼女は現在保有するタロイモ田の大きさと区画、パンノキやココヤシの本数を説明し、どの程度なら譲れるかを話す。しかし、男性はそれを聞き入れないことが多い。妹たちも自分の息子の言いぶんを認める。譲れ、いや譲れないの口争いになることもある。タロイモ田の分与は彼女の裁量にまかされる。パンノキとココヤシの贈与数量は男性族長ヌグトが彼女の考えにもとづいて決める。女性族長としてのナティクは一族（リニージ）の土地をとりしきり、その処分について強い発言権をもっているのである。

### 男の一日

ナティクを「女性族長」とする母系家族には、六人の婿たちと、

二人の成人した独身男性がいる。日常の生活でそれらの男性の活動を指揮するのは、ナティクの妹の夫、ブッカニークである。彼は六十五歳になるが、今でも魚とりやココヤシの世話もする。婿のなかで最年長者の彼はサウォ・プウコス〔家族のことを知りつくした男〕とよばれ、「屋敷長」の役につく。屋敷長は島の集会で決まったことを家族成員に伝達したりもする。ナティクの一族の族長ヌグトは、隣村に婿入りしており、一族に大きな問題があるときに顔を出すくらいなもので、ふだんはこの屋敷に來ない。この一族は島の酋長を出す高いランクにあるので、ヌグトがその役についている。

ナティクの娘ネカウは二度結婚し、先夫と二番目の夫ガープエとのあいだにそれぞれ三人の子どもをもった。ガープエは小学校の教頭で月に六百ドルの給料を得ている。彼は学校が休みの日には魚とりに出るが、パン果の採取、ココヤシ林の手入れなどはほとんどしない。彼は店を経営している。給料を元手に、米、缶づめ、砂糖、醬油の食料品のほか、タバコ、蚊とり線香、ゴムゾウリなどの雑貨を仕入れ、販売している。しかし、店からの利益はない。その理由は、家族だけでなく親族の人びとにも掛け売りをするからである。彼も利益を追求しておらず、「プウコスの人がいもがないときに米を、魚がないときにカンヅメを食べられればよい」と考えている。連絡船が入り、店に物資が豊富なあいだ、プウコス（屋敷）に住む人びとが彼の家に朝夕に顔を出し、タバコやコーヒーをふんだんに飲む。彼も品物が店にあるかぎり拒否しない。彼の妻が米を炊いたときには、プウコスの人びとに配る。また、プウコスの子どもが病気でヤップ病院に入院するときにも、船賃や治療費を出してやる。

ガープエが子どもにあげたココヤシ林やパンノキの手入れは、妻の先夫とのあいだの娘ネラクの夫、ラッポウにまかされている。ラッポウは三十歳で働きざかりの青年である。彼が世話するココヤシは千本をこす。そのうちの百本は彼が持参したものである。二本のパンノキと六十坪のタロイモ田も妻に贈っている。パン果のなる時期、ラッポウは五時ころに起きて、母方のイトコたちと釜をひきあげに出かける。釜は裾礁の外側、水深十メートルの海底にしかけられ、三日おきに、なかに入った魚をとり出す。七時ころに分けまえを手に家に帰り、魚をナティクに渡してプウコスの人びとに分配してもらう。それから、男たちが集まる集会所に顔を出し、酋長からその日の共同労働の有無を聞く。その仕事があれば水を浴び、ガープエの家でコーヒーを飲みながら家族の仕事の段どりを話しあう。パン果の採取の日であれば、ナティクの末息子マイクといっしょにナティクが指示したパンノキに登り、パン果を落とす。それが終わると、妊娠している妻と子どもが飲む若いココヤシの実をとってくる。

釜をあげない日は、共同漁がなくても朝七時ころから魚とりに行く。小型カヌーを漕ぎ出し、裾礁付近で潜水による突き漁、底釣り漁を行う。三十四匹あまりのブダイやハタなどをとり、午後三時には帰る。子どもたちが海岸で待っている。カヌーを木かげにかつぎあげ、子どもたちに魚を持たせて家に帰る。道で会った人に、気前よく二、三匹の魚をあげる。彼は家に入るまえに、森にある池で水浴びをし、コブラの油を身体に塗り、禪をとるかえる。朝からココヤシの実をかじっての魚とりなのでおなかもすいている。妻をはじめプウコスの女たちが料理をつくっている炊事小屋へ立ち寄り、食べものを口にしてからカヌー小屋に行く。そこで、手斧で樫をつくりながら男たちと今日の魚とりの様子や世間話をする。六時半ころ、子どもたちを連れて池で水浴びをし家に帰る。それから、一家でパン果をついた料理と、



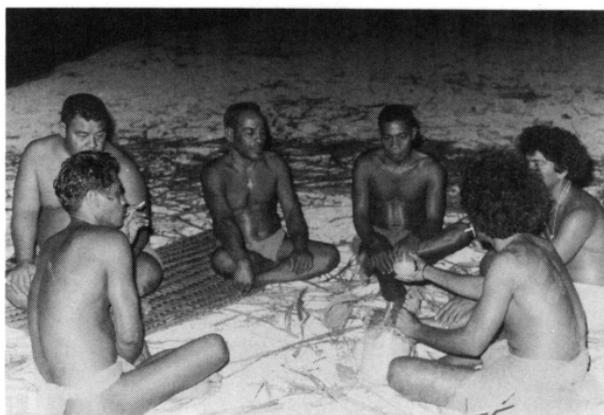
アリーの採取

煮た魚をおかずにして夕食をとる。

#### ヤシ酒とコブラ

パン果がなくタロイモと貯蔵パン果（マール）が主食となる十月から翌年の三月にかけては、北東貿易風が強まり、雨の日も多くなる。男たちが魚とりに出られる日は週に一日か二日程度である。食べものが乏しくなる時期だ。一日にタロイモ二個という日が続くこともある。酋長は男たちに、ココヤシの若芽から液汁を採取する許可を出す。この液汁はアリーとよばれ、白色の甘い飲みものである。子どもや女性が好む。ラッポウは四本のヤシの木からアリーを集めている。ヤシの新芽全体をココヤシの細紐で固くしばり、その先端をナイフで切り落とす。そこから液がしたたり落ちる。それをココヤシの実の殻容器をあてて集める。この採取は夜明けとともに始まる。ナイフ、ヤシ殻と一升びんを手にし、木に登り、一晩おいてアリーがたまっているヤシ殻を外し、新しいヤシ殻容器を紐で固定する。そのときココヤシの芽を薄く切る。これは液汁の出をよくするためである。約一時間かけてヤシ殻のアリーを集め、びんに移して家に持ち帰る。四本の木から一升びんに二本はとれる。

ヤシ殻容器を毎日洗いとりかえると、アリーは発酵しないで甘い飲みものになる。その容器を洗わな



ヤシ酒をつぎ、知識の伝授をうける

いと、容器のなかにたまった発酵源で、その液はビール程度のアルコール分を含んだ酒になる。男たちは午後二時ころから、カヌー小屋に集まってココヤシの紐を膝の上でなったり、カヌーの修理をしながら酒盛りをする。一人、一升びんを一本ずつ持ちよる。それは、朝採取したものである。甘ずっぱい白濁色の酒で、輪になりコップに一杯ずつまわし飲みをする。五く六杯も飲むとほろ酔い気分になる。そして、夕方にはとりたてのヤシ酒を持ち寄り夜の部の酒盛りになる。みんなのヤシ酒がなくなるまで続

く。航海の歌なども出、話に花がさく。九時ころには宴も終わる。酒を飲む仲間は親族関係者である。それはカヌーの建造、航海術や島歌など、秘密の知識をこの場で若者が長老から教えてもらうからである。この夜の部の酒盛りは「月あかりのもとでのヤシ酒」とよばれる。

パン果が結実しない時期、男たちは漁労活動よりも、陸での生産活動に従事する日が多くなる。といっても、午後は酒盛りになるので実働は午前中だけ。無線で船が来島するとの連絡が入ると、コプラづくりに専念する。コプラは成熟したココヤシの実のなかにつく果肉である。良質の植物油がとれるので日本に輸出される。ヤシの木の下刈りをしながらすでに集めておいたココヤシの実を森から家に運ぶ。実を山刀で二つ割りにして、白い果肉を削り出す。それから四日ほど天日で乾燥する。

この作業はプウコスの子三軒の家が組に分かれて行う。ラッポウは妻の母方オバの夫と組になる。これには、妻をはじめ女たちも加勢する。船が来る三週間まえくらいからコプラづくりにとりかかるが、男手二人、女手五人で、五百キログラムのコプラを売り渡すのが精いっぱいである。その売上げ金も百二十ドル（一万五千元）見当で、一部をナティク（妻の祖母）にあげ、残りを夫婦単位に分配する。ラッポウが手にする現金は五十ドル程度で、米、缶づめ、砂糖、タバコ、ランプの灯油そして漁具などの購入にあてられる。コプラ買いつけの船は年に四〜五回来るので、ラッポウがコプラを売って手にする年収は多くて三百ドル。コプラが唯一の換金作物で、それ以外の収入の道はない。お金が必要なきに、自分と妻の一族（母系リニージ）の人びとに協力を求めればよい。

#### 航海者

ナティクの息子イキチェプは、中堅の航海者として他島や無人島にカヌーで出かける。カヌーを操るには六人の男手がいる。彼が航海するときには、マイクをはじめナティク一族の男たちも乗組員にくわわる。五百キロをこす島への航海では、母系一族の男たちだけで乗組員をくむ。航海の目的はおもに、よその島にいる親族の訪問と交易である。そのほかは、無人島での魚とりだ。一九七八年六月から一年間にサタワルの男たちは十二回の航海をした。のべ二八艘のカヌーで、二百八十人もの男たちが出かけている。そのうち、一回は八百キロ離れたサイパン島への航海、七回は百キロ北の無人島、ウエスト・ファージュ島での漁労活動である。その間イキチェプは三回も出かけた。その島に行ったのは、ウミガメが産卵に上陸する六月と、サタワル島の付近で魚がとれなくなる十一月と十二月であった。



無人島で捕えたウミガメの陸あげ

無人島へ出かけるのは、島の人びとに魚、シャコガイ、ウミガメを食べさせるためである。と同時に、男たちはそこでふんだんに魚を食べることを楽しみにしている。

無人島の漁業資源は酋長の管理下であり、そこでの漁獲は島の人びとに分配される。男たちは、どれだけの漁獲を島に持ち帰るかでしのぎをけずる。漁獲といってもウミガメが主となる。片道一昼夜かかるので生魚は腐ってしまう。カメなら捕獲後十日間は生きているし、三匹もあればその肉は全員に配れる。イキチエプは一週間の滞在で捕えた七匹のカメのうち四匹を、乗組員にその島で食べることを許した。そのことが酋長の耳に入り、彼はそれから一年間ウエスト・ファーク島へ行くことを禁止されてしまった。イキチエプは航海者として、無人島での漁労活動のすべての責任をおっているにもかかわらず、漁獲の多くを勝手に浪費したからである。

酋長がイキチエプにあたえた制裁は、島の人びとにも知れわたった。彼はその後も男の集会には平気で出ており、悔いている様子はなかった。しばらくして、彼の母

ナティクが一週間ほど寝こんだが、イキチュエは一度も見舞に来なかつた。そのわけを聞くと、無人島でのが恥かしくて、姉や妹たちに会うことができなかつたからだと言う。彼にかぎらず、サタワルの男たちは、自分の不名誉な行いを姉妹に知られることを極端に気にする。共同調査者の石森氏が時計のある青年に盗まれたとき、酋長に頼んで返却を求めたがいっこうに解決しなかつた。一人の長老が、酋長よりその男の姉に申しつけた方がいいと教えてくれた。姉妹は自分の兄弟が悪いことをしてかしたと聞くと、自分の罪（ティピス）として悲しむからだ。男性にとつては、姉妹を困らせる行動が面目を失う、もっとも恥かしいことと考えるともいう。どうも、サタワルの男性が自分の言動を律する根底には、「姉妹の影」がちらついているようである。

サタワルの母系家族の人びとは女性族長と男性屋敷長の指示にもとづいて日常の生活をおくっている。男性は漁労や航海とココヤシやパンノキといった樹木の植栽と管理に責任をもち、女性はタロイモ栽培と料理をうけもつという分業制のもとにそれぞれの生産活動に従事する。主食となるタロイモづくりやパン果の採集、貯蔵は女の仕事である。個人が生産、獲得した食糧であっても母系家族の人びとが共同で消費する。また、男たちが島周辺や無人島でとつた漁獲も島の人びと全員に均等に分配される。この食べもの共同消費という考えかたが、「来て食べなさい」という女たちの呼びかけにも表われているのである。

## 2 出産・誕生・子育て

現在、サタワルの八十七組の夫婦のうち、十人以上の子どもをもつ夫婦は十一組である。最多はピアイルク夫婦で十七人。逆に、実子のない夫婦も八組ほどいる。私は年齢別に四十五人の男女から、子どもは何人いて、息子と娘の割合はどのくらいが良いかを聞いてみた。子どもは多いほど良いというものがあるがほとんどで、その人数は七～八人が目安になっている。子どもは「ほんとうの大人ではない」からだともいう。サタワルでは多くの子どもを生み育てることが「夫婦のつとめ」とみなされているようである。

性比については、娘を多くもつことを好み、息子四人、娘四人の組みあわせよりも息子一人、娘七人と答えるものが大半であった。ただし、息子が一人もいないと、「兄弟姉妹の關係」ができないので良くないという。多くの娘を欲しがるのは、「娘さえいればタロイモと魚の両方が手に入るからだ」と説明する。これは婿入り婚との關係で、娘が主食のタロイモ、その婿が魚をとってくるから食べるものに困らないことをさしている。息子を何人もつても結局はよそへ婚出するからあてにならないのである。娘を重要視するのは、家族の日々の生活のためだけでなく、母系の血筋を連続させ、母系一族（リニー

ジ)を絶やさないために当然のことである。

私の家の隣人、ラッポウ夫妻には三人の息子と一人の娘がいる。長男はラッポウの母の養子になっている。ラッポウは妻、ネラクが妊娠四ヶ月めとあって何かと気をつけている。ネラクがタロイモ田へ行く日には双子の息子(三歳)を相手に家のまわりでぶらぶらしている。たとえ、島の男が共同漁で総力をあげる日であっても、海に行かない。男たちが漁から帰ってくるころには、子どもを腰の両側にかかえてカヌー小屋へ出むく。魚の分けまえをもらうためである。これはズル休みで恥かしいことではなく、人びとから認められた父親としての大事な役目である。

月明りのない夜、海が凪いでいればラッポウはガス燈をもってアジ釣りに出かける。昼間、男たちのヤシ酒の輪にくわわらずコプラづくりに精を出して疲れていてもである。妻に魚を食べさせたいからだという。十二時ころには帰ってくる。妻が眠りこんでいるのを確かめてから、おすそわけのアジをもつてわが家へ来る。彼のねらいは私のウイスキーにある。翌朝、妻から小言をいわれるのがわかっていても酒好きのラッポウはなかなか帰らない。ラッポウにかぎらず、また妻が妊娠中でなくても、サタワルの男たちは幼児をかかえているときにはじつによく子どもの世話をする。

### 伝統的な子育て

サタワル社会の子育ては、母親が妊娠した段階から始められる。女性はグファル(月経)が休止することによって妊娠したことを知る。彼女は夫や姉、母にそのことを伝える。妊婦はバランスのとれた食生活を

送ることを心がける。そのため、夫は島の共同漁やプッコス（屋敷）の男たちによる集団漁がない日でも、一人で突き刺し漁や底釣り漁を行う。また、妻が毎日飲むためのココヤシの若い実をとってくる。男性の姉妹や母親はその妻が妊娠したとなると、毎週土曜日や「大きな食べもの」をつくったとき、かならず彼のもとに料理した食べものと魚を届ける。この贈り物は、ニッペール（収穫物の知らせ）とよばれ、リニージの男性成員と彼の子どもが食べるものと考えられている。それはまた、生まれてくる子どもを養子にひきとりたいという親族からの意志表示でもある。

胎児や一人歩きするまでの乳幼児は、コースとよばれる「霊的存在」と深くかかわっている。コースは乳幼児期の子どもを庇護すると同時に、子どもに病気などの災いをもたらず、という信仰があるのだ。妊婦は妊娠三、五、七、九ヶ月めに「妊娠の呪薬」を一週間飲まされる。その薬はココヤシの樹皮、芳香のする草の葉、シダ類の根などをすりつぶして、ココヤシの液汁に混ぜたしほり汁である。三ヶ月めと五ヶ月めの薬はつわりをやわらげるとともに、母胎にいる子が強いか弱いかをためすためであるという。もしひ弱な胎児であったら、コースの霊力をかりてその呪薬によって葬ってしまうもくろみがある。実際にその薬を飲んで流産をした経験をもつ女性はかなりいる。してみると、その薬学的成分はあきらかではないが、子宮の収縮をひきおこす作用があるとも考えられる。いずれにせよ、子どもは胎内にいるときから、「強く産まれおちる」ことを願う親たちから、手荒い洗礼をうけるのである。

妊婦は「腹のヒト」ないし「腹のふくらんだヒト」とよばれ、ふつうの人間（アラマス）とは異なる状態にあるとみなされている。<sup>(1)</sup>そのため、妊婦にはさまざまなエピン（禁忌）がともなう。彼女は朝昼夕に水浴し、昼間は腰布の上にシャツや貫頭衣をまとう。いろいろの食物規制を守らなければならない。

タコ、エビ、ヤシガニ、ウニなど、穴の中をすみかにする生き物を食べてはならない。難産になるからである。形がゆがんだり、凹んだパンノキの実、ネズミがかじったココヤシの実も禁食である。頭の子の子どもが生まれるからだ。流木にふれたり、それをまたいではならない。これは島の外からの悪いものが身体にはいりこむからである。四ヶ月めまでと七ヶ月以降は夫と性関係をもってはならない。胎児が流産してしまうという考えからである。さらに、出産のためにこもる産小屋にいるあいだは、ふつうの人と同じ田や林からとったタロイモ、パンノキ、ココヤシなどの食物を口にしてはならない。マグロ、カツオ、タカサゴ、ヒメジなどの回遊魚も食べてはならない。それらの禁忌を守らないと、「血のけがれ」が島中に蔓延して、島の重要な食糧資源を枯渇させるといふ信仰があるからだ。

そのようなタブーを守るとともに、日常生活においても妊婦の胎教は大事である。妊婦の気分を害したり、怒らせ興奮させたりすると、胎児はコースによって死産にさせられたり、産まれても病弱になると考えられている。妊婦の心境を穏やかにさせるのはその夫の責任である。夫は妊娠中の妻の要求を優先し、できるだけ妻のそばにすることが日課となる。妊婦の胎教にはなによりも夫の気くばりといつくしみの心が大事である。この妻と夫との関係は、子どもが話し出し、一人で歩けるようになる二〜三歳ころまで続く。

## 出 産

出産にかかわる準備や出産の処置は、妊婦の夫、つまり新生児の父親の姉妹や親族が大きな役割を担う。現在、出産は妊産婦の家で近代医学の知識を学んだ診療所の「保健夫」の手で行われている。キ

リスト教をうけ入れた一九五三年までは産小屋でお産した。産小屋は月経小屋とともに海岸部に建てられており、その周辺の一定の区域はネー・イムア・ニ・カット（「子どもの家のある場所」とよばれた。そこへは月経中の女性や妊産婦と、そのつきそい（女性）よりほかの人の立ち入りが禁止された。ここでは、一九五〇年代以前の「伝統的」な出産慣行を中心に述べることにする。

多くのタブーはあるものの、妊婦は臨月近くまで、母親、姉妹たちと、料理づくりをはじめタロイモの栽培や腰布織りの仕事を続ける。強い陣痛を感じると彼女は産小屋の建っている場所に移る。このとき、妊産婦の食事や身のまわりの世話をする一人の女性、インネウ（子どもの多い母）と、出産の処置をする一人の女性、ケムヌプウ（腹をささえる人）とがつきそう。ケムヌプウは産婆役で産婦の夫の父の姉妹があたる。サタワルの年配の女性なら誰でも、産婆の知識を身につけている。産婦は寝た姿勢でお産をし、産婆役の女性が竹のへらでへその緒を切り離す。へその緒や後産で出たものは、産屋の近くのココヤシの木の下に埋める。インネウには夫の姉妹や母が選ばれる。彼女は出産にも立ちあい、水浴び用のお湯をわかすなど出産の手伝いもする。妊産婦はお産のために産小屋に四日間こもるが、その後には月経小屋ですごす。ネー・イムア・ニ・カットにいたるのは二十日間。この間の食料は夫から贈られたタロイモや夫のパンノキ、ココヤシ林から収穫したもののほかは、彼女の夫のリニージがおもに調達する。

子どもの誕生が知らされると、酋長は島の男たち全員に魚とりに出るよう命令する。漁は四日間に行われ、禁漁区の漁場も解禁になる。この共同漁はロウ（「手網漁」とよばれ、産婦に魚を贈り、「母乳の出をよくする」ために行われる。酋長は漁獲のなかから、二十匹ほどの「良い魚」を産小屋に届けさ

せる。残りは、漁に出た男性がその場で食べる分をとり、島の人びとに均等に分配する。産婦のリニージはロウのお返しをするため、「大きな食べもの」をつくる。夫のリニージでも女たちが大量のイモを産婦の家に持参し、その家の女たちといっしょに料理をつくる。男たちが漁から帰るまでに、タロイモの料理をカヌー小屋に運ぶ。男たちはその料理と分けまえの二〜三匹の魚を焼いて共食する。ロウは産婦に贈る魚をとる共同漁ではあるが、同時に島の人びとが子どもの誕生を祝う行事でもある。

産婦はネー・イムア・ニ・カットに二十日間いたあと家へ戻る。そこから出る日の朝、産小屋のある禁域とムラとの境界でペーベ（「けがれおとしの儀礼」）が催される。この儀礼は語義からあきらかなように、出産のため産屋という禁域に隔離された女性が日常生活へ復帰するための、一種の通過儀礼である。サタワルの人びとは、出産直後の女性や月経中の女性をファーン・プット（「良くない状態にある」）とみなしている。産小屋で子どもを産んだ女性を正常な状態にもどすためには、何らかの儀礼的処置が必要とされるわけである。ペーベ儀礼の司祭者（女性）は二枚に束ねたシダの葉を、島で最高位の呪術的知識の修得者のところへ持っていき、その葉に「霊力」を授けてもらう。それから司祭者は産婦と二人のつきそい女性に一枚の布をかぶせ、呪文を唱えながらその葉を彼女たちの身体に叩きつける。司祭者の役をひきうけるのは、新生児の父親のリニージの老女である。

現在では、出産が妊産婦の家で保健夫の手によって行われるので、つきそい人は妊産婦の家に通って水浴などの世話をする。ロウの共同漁も実施され、島の人びとが子どもの出生を祝う習慣も続いている。そして、妊産婦は食べもののタブーをまもっている。つまり、産小屋での出産、出産のけがれ落としの儀礼は実行されていないが、新生児の父親の近親者が出産においては依然として中心的役割をはたして

いる。

### 這いはじめの儀礼

子どもが生後六ヶ月をすぎ、這い出すようになると、子どもが丈夫に育つことを祈願する儀礼が行われる。これはアテーテ・クースとよばれ、「タコを這わせる」という意味である。母親は大きくて「かたい」タコの頭部をもち、子どもの頭の上で右方向に四回まわす。それから、母親はタコの全体を指先でふれ、その指を子どもの口にふくませる。サタワルの人びとは、乳児をタコと同じように「這う動物」と考えている。したがって、この儀礼はタコのもつ属性に人間の身体を同化させることを意図している。そのさい、大きくて固いタコが選ばれるのは、しっかり動ける子どもになることを願うからである。この儀礼でつかうタコは、父親のリニージの男たちが捕えたものである。

### 乳幼児のしつけ

子どもは母乳で育てられるが、一歳をすぎるとバナナをすりおろしたり、ココヤシの若い果肉、タロイモの茎をゆでてすりつぶしたものを食べるようになる。子どもの足どりがしつかりし、話せるようになる三歳ころまで、両親の性的営みは厳禁される。もし性関係をもつと、コース（靈的存在）<sup>(2)</sup>によって子どもに病気などの災難がふりかかると信じられているからだ。この禁忌は、母体を保護するとともに、食糧資源が限られた島の人口を一定にたもつための伝統的方法であったとも考えられる。また、幼児を一人にしておいてはならない。母親か父親、彼らの近親者はかならず子どものそばにいて世話しなければ



ココヤシの果肉を食べる子ども

ばならない。子どもをおいてきぼりにすると、悪霊に「食われ」てしまうからである。このように、霊的存在とかかわる子育ては、胎教から始まり、子どもが一人の「人間」とみなされる時期まで、子どもを主体に展開される。日本には子どもは「七歳までは神の子」ということわざがある。サタワルでも乳幼児はコース（神）の庇護のもとに成長すると考えられている。しかし、子どもが自分の気持をことばで表わせるようになる、三、四歳ころからは神との関係はうすらいでゆくようである。

自然に乳離れをして、一人で歩きだし、ことばを話しはじめるところまでの子どもは、コココとよばれ、甘やかされて育つ。けれども、親たちは、子どもがいたずらや親の意にそむくことをしてかすと、口ぎたなく罵る。子どもを叱るときに親は「縛ってやるぞ」とか「死んでもよいか」というおどしのことばをひんばんに口に出す。これは親たちが子どもにものごとの善悪をおぼるげながらに教えるための表現でもある。また、「こわい」とか「おそろしい」といったことばも多く耳にする。サタワルの人びとの日常的な行動を律する基本は、この「おそれ」の観念にもとづいている。社会秩序の根幹は、島生活での禁忌事項を守ることにある。それを犯すと神から罰がもたらされるといふ考えかた、それが「おそれ」で表わされるのである。乳幼児期におけるこの社会の子そだては、子どもを甘やかすだけ甘やかし、そのなかで親

たちが社会のしきたりについてのイメージを子どもに教えこむことにある。

親の手をはなれ、一人で行動できる四、五歳になると、子どもはウォー・ニ・カットとよばれる。ウォー・ニ・カットは「幼い子の上になる」というほどの意味で、幼児（童子）と訳せよう。男児は身に何もつけないが、女兒は腰の前後に草の葉を束ねたものをあてがう。この歳ごろから十歳までは、子どもたちにとって、自由で、勝手気ままにすごせる時期である。現在、子どもたちは四歳から幼児学級、六歳から八年制の小学校に通う。学校で給食をとり、午後二時ころに下校すると、教科書を家にほうりなげ、男女の別なく群をなして海辺で遊ぶ。人とり、陣とり、鬼ごっこ、ビーズ玉あてをししたり、島歌を大声で合唱する。まさに子供の世界にひたりきるときである。親たちは何の干渉もせずに、子どもの自主性にまかせる。学校が休みの日に、母親は女の子がタロイモ田へ行くといえは連れてゆく。森で拾い集めた薪やヤシの実を家に運ぶのを手伝わせる。男の子は海に入って半日も上がってこない。古いカヌーを礁湖に引きずり出しては、魚つりや釜漁で小魚をつかまえる。兄たちの磯漁について行くときは、とれた魚のかつきぎ役をひきうける。父親がカヌーをつくっていると、そばで手斧をとって木を削ったりする。あぶなっかしい手つきではあるが父親のまねごとをしては得意になる。友だちとのけんかもひんぱんに起こるが、親たちは見て見ぬふりをする。

口争いで友だちにはかにされ、母親や姉の悪口を言われたと泣きながら帰ってきたときには、親はそのことばの意味を教える。母や祖母に叱られると、子どもは反抗して「悪いことば」をなげかけたりする。それを耳にした親は、血相をかえて子どもをとりおさえ尻をぶつ。泣き叫んでも手をゆるめない。そんな場面によくでつくわす。「おまえの母を〇〇せよ」といういいかたは、この社会でもっとも忌避

すべき罵倒表現なのだ。それは一族の面目を根底から否定する忌まわしいことばだからである。それがどんなに悪いことであるかをよく話して聞かせなければならぬ。また、子どもが親族関係のない家でも物を食べたりすると叱り、父方のオバや兄の家でなら食事してよいと名前をあげて教える。子どもが羽目はずし、よその畑のパイナップルやサトウキビを盗んだりしたときも大騒ぎになる。わが家に入っていたロレンソ君がココヤシの木に縛られて泣きわめいていたことがあった。私の家に入ったお菓子をとったからだという。たしかに菓子袋の蓋はあいていた。そんなにまでしなくても思い、私が縄をほどこうとすると、彼の母親はそのままにしておくようにと言って私のすることを認めない。ロレンソ君が解放されたのは、それから二時間後のことである。子どものしつけのなさは、その母親の一族の「恥」とされるからである。

幼児期の育児においては、親たちは社会の秩序を乱すような子どもの行為にたいして口をはさむだけで、子どもの世界へは入りこまないという考えをもっている。親たちは子どもの将来のためにといううな欲ばった野望や教育に関心を示さない。子どもたちは遊びながら、初歩的な生活のしかたを身につけてゆくのである。

#### 思春期の教育

子どもが十歳にちかづくくと、親たちは子どもを「働き手」としてあてにする。また、いろいろな知識や技術を教えこんでゆく。子どもの成長段階を表わす名称も、男女別べつになる（表1参照）。男子はアテ・ムアーン、女子はアテ・ロープウトとよばれる。アテは「子ども」、ムアーン、ロープウトは、

2 出産・誕生・子育て

表1 年齢と成長名称

年齢(男性)	成長段階名称	年齢(女性)
0歳	ココ (乳児)	0歳
3歳	ウォー・ニ・カット (童子)	3歳
10歳	アテ・ムアーン (成人まえの男子)	8歳
12歳	アピ・ニ・カット (禪を結べる男子)	10歳
20歳	ムアーン・アニヤン (若い成人男性)	12歳(初潮)
40歳	アニ・ムアル (十分な成人)	30歳
60歳	ツクファイ (老人)	60歳

それぞれ「一人まえの男」、「一人まえの女」という意味である。<sup>(3)</sup> 彼らは「大人の見習い」とか「大人の予備軍」と位置づけられるのである。女の子はココヤシの葉を裂いたシッシフ(腰みの)をつけ、妹や弟の子守をひきうける。母親や母方のオバたちといっしょに森へ出かけ、一族の財産であるココヤシ林、イモ田の境界を覚える。タロイモ田に入って泥まみれになりながら、イモの畝づくり、植えつけ、草と

りなどを教えこまれる。そして、胸のふくらみのはつきりし、恥毛がはえる十歳ころからは、腰布を地機で織る特訓が始まる。女の子は初潮前に芭蕉布を織る技術を身につけることが、一人まえの「女」になるための第一の条件である。また、一族の兄弟にたいする礼儀作法などもことこまかに覚えなければならない。

幼児期まで、いっしょに遊び戯れていた兄にたいしても、敬語をもちいなければならないとか、兄のいるまえを立って歩いてはいけない、兄の所有物に手をふれてはいけないなどといった禁忌を教えこまれる。もしそれらを守らなかつたら、一族のだれかが病気になるし死んでしまふとおどかされる。この初潮まえの女の子は、ユーメサヌ・ウヌトとよばれる。それは「織機のまえに立つ(女)」、つまり「地機で布の織りかたを習得する(女)」



機織りの練習



カヌーづくりの手習い

を意味している。

男の子も、父親、兄たちに連れられて、魚とりやほかの島へカヌーの航海に出かける。潜水法、魚の突きかた、釜のしかけかた、カヌーの操船法など、現場での厳しい訓練が始まる。荒海で船に酔いながらの航海は容易なことではない。彼らはその体験をとおして「真の航海者」になれるか否かをおのずと知るようになる。陸上では、ヤシの実やパンノキの実の採取、ココヤシ紐のないかた、家やカヌーづくり、航海術の手ほどきをうける。身体には父や兄の使いふるしでなく、自分の禰をつけるようになる。島で生きてゆくための知識や技術の特訓が始まる十二〜十三歳ころから、男の子はアピ・ニ・カット（「禰を結べる男」とよばれる。この年ごろになると男の子は姉妹や一族の同世代の女性といっしょに食事をしたり、同じ家で寝ることが許されない。海岸にあるカヌー小屋で、独身男性と寝起きする生活を強いられる。

親たちは子どもに島で生活するために不可欠な技術や知識をひととおり教えるが、航海術やカヌー建造などの専門的知識については、やる気と素質のあるものだけに伝授する。つまり、伝統的な知識を継承していけそうな子どもだけに「英才教育」をほどこすわけである。興味深いのは、その教育も親から一方的になされるのではなく、子どもの意志に任されるといふ点である。また、この年ごろの子どもは、親と行動をともにする時間がふえるが、仕事のないときには男女つれだつて森にピクニックと称して遊びに出かけたりもする。少女たちが夜に浜辺で歌を合唱しているところへ、少年たちが入りこんで遅くまで遊ぶ。そのような若者の行動についても親たちはとやかく言わない。

サタワル島の子育ては、独自の胎教から始まり、子どもを甘やかし、子どもの世界に放任しておく時期と、大人の世界へ仲間入りするための術を身につけさせる時期とを区別している。そのけじめはほぼ十歳が目安になる。これは、子どもの衣服によつても示される。しかし、両時期に一貫していることは、島社会で生きていくうえでの行動様式と技術・知識とを身につけることが重視されている面である。親たちが代々うけ継いできた有形・無形の「財産」を次世代に伝えることを子育ての目的としているのである。親たちが習得できなかった知識や「見はてぬ夢」を子どもにおしつけることはしない。子どもに独立独歩の生きかたを期待しているにすぎないのである。

#### 成人期の儀礼

少女が十二〜十三歳ころになって初潮をむかえると、一定期間、月経小屋に隔離される。彼女の一族や父の一族の女性たちは、少女に新しい腰布を贈る。彼女はそのなかから気に入ったものを選び、初め

て腰にまとう。それで、「一人まえの女」になったことが公になる。身体にはウコンの粉末をぬりたくってつきそいの人に連れられて月経小屋に入る。ウコンで化粧するのは、悪霊が彼女の身体に入るのを防ぐためである。初潮の女性は月経小屋にこもり、一日に三回海で水浴をするほかは小屋の中に横たわっている。月経中の女性がするようなゴザ編みや腰布織りの仕事は禁じられる。食事もつきそいの人がつくってくれるものを食べる。このようにして五日五晩を月経小屋で過ごすのである。月経小屋での生活は、女の人にとって楽しみであったという。きつい仕事もなく、うわさ話や昔ばなしをしたり、歌をつくったりできたからである。

母親からは月経小屋の中では静かにしていないと悪天候になったり、悪霊に食べられて「気違い」になると教えられたにもかかわらず、初めて月経小屋へ行く少女の中には、恐怖や恥かしさのために、大声を出して泣くものもいる。悪霊にとりつかれて海のなかへ入り、どんどん沖のほうへ歩いていった経験をもつ女性も多い。つきそいの方は、そのような少女の精神的不安をなだめてやったり、悪霊を追いはらう呪文を唱えたりしなければならぬ。このつきそいの方は、初潮をむかえた少女の父親の姉妹や母の役目である。

初潮を経験した少女は六日目の早朝、海で水浴をし、つきそいの人にウコン粉で念入りに化粧をしてもらってから、月経小屋を出る。彼女の母親や一族の女たちが、月経小屋のある禁域と村との境界で迎える。その境界では、イナメス（幸運さすけの儀礼）が行われる。老女が少女の首、手首、足首にコヤシの若葉を結びつける。そのとき、老女は少女から女になったことを神に告げ、「神に好かれるように」、「よく仕事ができ食べものをつくれるように」、「早くよいムコがみつかるように」といった意味



腰布をつけた娘

の呪文を口にする。この儀礼の司祭者の役は彼女の父親の一族の老女があたる。

かつては、航海術、カヌーづくり、嵐しずめ、パンノキの豊穡儀礼など秘儀的知識を身につけた男性は、月経小屋や産屋にいる女性を目にしただけでその知識の効力が失せたといわれる。たとえば、航海で漂流したり、建造したカヌーにひびが入ったりした。その力をとりもどすためには、浄めの儀礼をとり行わなければならなかった。<sup>4</sup>月経小屋と産小屋がとり壊された現在、長老たちは、まえよりも海で遭難することが多くなり、パン果のできも悪くなったと歎いている。それは、秘儀的知識をもった男たちが月経中の女性や産婦と接するようになったからだという。

少女にくらべ少年においては、成人期への移行を象徴するような儀礼は存在しない。父親は息子が魚とり、ココヤシやパンノキの手いれ、ヤシ紐のないかたなどを身につけたと判断すると、酋長に申しでる。酋長が男たちの集会の場でそのことを公にするだけで、一人の「島の男」が誕生したことになる。だいたい十八歳から二十歳にかけてである。しかし男性は、島の生活に欠かせない技術を身につけるとともに、伝統的な航海術を修得することも「島の男」とみなされるための条件とされている。航海術の知識の伝授は少年が十歳をすぎたころから始められる。「航海者の認定」をうけている父親は、自分の知識を息子に伝える責任がある。そのような父親をもたない少年は母方オ

ジから伝授される。

少年が父や近親者から航海術の手ほどきをうけるのは、私的教習とみなされる。社会的に公認される「航海者」になるためには、特定の儀礼をうけなければならぬ。これがポ（航海術修得の承認儀礼）である。この儀礼は航海者が全員参加して四日四晩カヌー小屋で行われる。島でもっとも有能な航海者が師匠になって若者の知識内容を試問する。まちがった返答をすると、皆から罵倒される。知識が十分でない、若者は師匠とともに数ヶ月にわたって、カヌー小屋に寝泊りして航海術の特訓を昼夜の別なくうけることになる。

サタワル社会における子どもの養育の過程、とくに儀礼的場面において、子どもの父親の姉妹を中心として、その一族が重要な位置を占めている。母系社会であるにもかかわらず、子どもと父の姉妹（一族）との結びつきの重要性について、人びとは「兄弟の子どもはわれわれの血（アフアクル）であるから」と説明する。

### 養育と父親の責任

子どもの誕生後、乳児は家のはりから吊したゆりかごに入れられる。祖母などがつきつきりて子守歌を口ずさみ、子どもをあやす。父親は子どもと妻のために食べものを確保することが第一の仕事になる。仕事がないとき、夫はできるだけ妻のそばにいる。妻の池での水浴びにつきあい、いっしょに食事することにも心がける。カヌー小屋での男たちのヤシ酒の酒盛にもくわわれない。とくに、夜は妻のもとを

離れてはならない。もし、無断で外出するなら、妻に自分の女性関係を疑われる。乳児をかかえた妻の精神的安定を保つことが夫の重要な任務となる。

夫は妻子にそのような「献身的」行動をするとともに、乳児期の子どもの処遇に関していくつかの「父親として」の責任をもつ。それは子どもの養子問題の解決、子どもへの財の贈与、子どもの命名などである。

## 養子

現在十五歳未満の子ども二百七十二人のうち、約六割は実親のもとを離れ養子に出ている。サタワルの親たちは、実子があっても養子を欲しがらる。若い未婚の女性でも養子をとるものもいる。また、孫がいるのに幼児をひきとって育てる老女も多い。養親と養子はほとんど親族関係にある。ふつう、女性が妊娠したと聞くと、子どもの親族のうち数人が養取を申し出る。それらのなかから養親を選び決定するのは、子どもの母親やその母方オジなど母系リニージの人びとではなく、その父親である。親族から養子の希望があれば、実親はほとんどの場合拒否できない。父親は子どもが長子（とくに男子）であれば、その子を自分の姉妹や母のもとへ養子に出す。長子を父親のリニージ成員の養子にする慣行は、サタワル社会の「制度」になっている。人びとはその理由として、「子どもが父親のかわりをしなければならぬから」と説明する。これは父親のリニージへ養入した子どもが、本来父親に任されている財産（パンノキ、ココヤシ林、カヌー小屋など）の管理を代行することをさしている。また、養子は養母（実父

の母や姉妹など)の老後の世話など、生涯にわたってその実子以上に養親につくす。

養子の理由にはそのほかにいろいろある。多くの子どもをもつ親を助けるのもその一つになっている。十七人の子どもがいるピアイルク夫婦はそのうち十四人を養子に出している。それなのに、彼らは四人の養子を育てている。娘だけしかないのです、息子を養子にするものもある。娘と息子の双方を育て、「兄弟」、「姉妹」としての役目をそれぞれに教えるためである。サタワル社会では子どもを育てない夫婦は「ほんとうの大人」とはみなされない。実子のない夫婦は三〜四人の養子をとることを熱望する。しかし、家のあとつぎがないから養子をとるという考え方はない。母系一族の女性の誰かに娘がいればよい。そうでなくても、他島にいる同じ一族から女性成員を連れてくる手もある。

養子は離乳期まえころから養親にひきとられ、授乳をするときと夜だけ実母のところへ返される。養親のもとで暮している二、三歳の養子は、養母の目を盗んでは実母のところへ逃げ帰ろうとする。それを取りおさえられては、道に寝そべてて大声で泣きわめく。父親の「身の代」で養子になった男性の話では、養子ぐらしは「肩身が狭く」「気が重かった」とのことである。幼な心には、父の姉妹や母との生活は固苦しいものと映るようである。ともかく、親どうして子どもをやりとりするサタワルの養子制度は、子どもをより多くの親族の手で共同で育てるといふ考えかたに根ざしているのである。

### 子どもへの財の贈与と命名

妻に子どもができると、夫(父親)は自分の姉や母に話して、パンノキ、ココヤシ林とタロイモ田を

分けてもらい、妻に贈る。これは「子どもを食べもので困らせないようにするため」の贈りものである。もし、父親がタロイモ田を贈与しないと、子どもたちは自分の一族の人びとから「この集団にはおまえたちの食べものはない」と言われることもある。男性が妻に贈ったそれらの財は、妻の一族の共有財とは区別される。子どもが成人するまでは、父親がパンノキとココヤシ林を、母親がタロイモ田をそれぞれ使用、管理する。子どもが大きくなると、パンノキとココヤシ林は父から息子へ、タロイモ田は母から娘へと譲渡される。それらの財は子どもたちの共有財となる。つまり、父親から贈られた財は父母を同じくする子どもたちが使用し、処分できるのである。

このように、母系親族集団（リニージ）には父母を同じくする子どもたち、子どもの立場からみれば兄弟姉妹が財を共有する「自立的」単位として存在することになる。兄弟姉妹の結びつきは、父親からの財の贈与という経済的基盤によって強化されるのである。父親の集団から財をもらった子どもたち（アフアクル）は、頻繁に父のリニージに顔をだしたり、そこで食事をするのが期待される。彼らは成人後、父のリニージで家の普請やカヌーの建造があるときには、率先して労力を提供する。そこで病人がでたときには、ココヤシや食べものを贈って見舞うことが生涯にわたって義務づけられる。もし、子どもが父親のリニージの人びとの期待を裏切ったりすると、父の姉妹などから、「あの子（アフアクル）の気持はこの一族にない」とみられ、贈った財を没収されることになる。

子どもの命名の時期は、ふつう子どもの生後一〜二週間以内である。その命名には、父親が責任をもっており、子どもの母親やそのリニージの人びとは口をはさむことができない。父親は彼の祖先の名前などを思いだしたり、男性ならば偉大な航海者であった男性祖先の名前の一部をとって子どもの名前に

する。命名にあたっては特別な儀礼を行わない。現在では、教会で洗礼をうけるときに、キリスト教の命名をうけているが、人びとは父親がつけた名前前で呼びあっている。

### 子どもと母方オジの關係

サタワルの人びとは、母系リニージの女性成員と彼女たちのもとへ婿入りした夫たちよりなる母系家族ごとに、屋敷（プウコス）を中心に日々の生活を営んでいる。大きな家族になると、七十人もの人がいっしょに生活する。リニージの男性たちはほかのリニージの女性のもとへ婿に行き、自分の姉妹たちの日常的な活動には干渉しない。彼らは特別なことがないかぎり、自分が生まれたプウコスに顔を出すことはない。けれども男性は自分のリニージの様子には気を配っている。ココヤシ林に雑草がはえていたりすると、彼は姉をとおしてその夫に手入れをするように言う。現在、少年のなかには、島の外で働いたり、留学するものもかなりいる。妹から子どもがグアムやハワイの大学へ行きたいという希望をもっていることを聞いて、その許しを出すのは母方オジである。子どもが結婚するとき、最後の判断をしてもらうのは、その両親ではなく母方オジである。母方オジが家に来たとき、甥たちは家のすみの方ですわってオジの話に耳をかたむける。思春期までは、男の子は母親や父親の言うことを聞いて生活してきたが、一人前になるとなにかにつけて、母の兄弟に一目をおくようになる。

姉から彼女の成人した息子（甥）が他のリニージの男を傷つけたことを聞くと、その兄弟は謝罪の品物をもって相手のリニージに謝りに行く。また、彼らは自分のリニージの若者が島の食料保護区域に入

ってココヤシを盗んだときには、お金を集めて島の酋長へ「罰金」を支払う。男たちは自分のプウコスに住んでいなくても、彼らのリニージの成人成員が島の秩序を乱すことを「恥」と考えており、それらの行動には目をひからせる。とくに、姉妹の子どものことには保護者としての全権をもっている。つまり、女性が彼女のリニージに関する問題で「頼り」にするのは夫ではなく、彼女の兄弟や母の兄弟なのである。

このように、母方オジは成人した彼の姉妹の子どもの言動を監督し、責任をもつ地位にある。そのため、子どもは母方オジを「監視する人」で「恐い存在」とみなしている。彼らは父親の手斧を無断で借用したり、釣り針を取ったりするが、母方オジの婿入り先を気やすく訪れたりしない。母方オジから航海などの秘儀的知識を習うときには、甥たちは魚やヤシ酒を持参してオジに好感をもたれるように心がける。また、彼らは母方オジがカナード航海に行くとき聞けば、水あかのくみ出し要員として乗組員にくわわる。甥たちは成人してからは母方オジの要求にこたえ、その指示や命令に従うことが義務となる。これまでの記述で、サタワルの男性は「父親としての立場」と「母方オジとして立場」という二つの顔をもっていることがわかってきた。男性は日常的な家族生活においては、父親として彼の子どもを養い、しつけ、成人させるまで世話をする責任をもつ。息子が島の男の仲間に入るまで、いろいろな技術を教えこむ義務がある。つまり、男性は家庭的分野において子どもが成人に達するまでの期間、独自の判断にもとづいて育児や養育を行うことができる。しかし、子どもが成人期をすぎると、父親はその子どもとの精神的つながりはあるものの、子どもにたいする社会的監督権、つまり権威を「他者」に譲ることになる。この他者が妻の兄弟であり、子どもの母方オジである。男性は自分の姉妹の協力をえ、ま

た自分の一族の財をも贈ることまでして、子どもを育てあげる。しかし、一人まえになると子どもは父親の手から離れ、母方オジの支配下におかれるのである。われわれの目には、サタワルの男性は「他者の子ども」を育てるしかない存在とうつるのである。

### 生殖の民俗知識

ブラウニスロウ・マリノウスキーの『パロマ』（一九三〇年）によると、トロブリアンド諸島の人びとは性交によって子どもが産まれるとは考えていないという。<sup>(5)</sup>さらに、子どもと父親のあいだに生物学的つながりがないと認識しているとも書かれている。しかし、このような生殖についての民俗知識はオセアニア社会に普遍的にみられるわけではない。ミクロネシアに限定しても、性交が生殖の基本であるのみなしている社会はかなり存在する。また、男女の生物学的物質の結合によって子どもがつくられるという、伝統的知識についてもかなりの報告がある。<sup>(6)</sup>

マリノウスキーの見解とは逆に、サタワルの人びとは男女の性交の結果子どもが産まれると考えている。彼らは「男が来て女と寝て、血を出してやると女の腹のなかに子どもができる」と説明するからである。ここでいう「血」とは、精液をさしている。精液（クス）は、日常の会話においては禁忌語になっており、代用語として血（チャ）で表現される。この血は女性の体内で骨（ルウ）をつくる源になる。このような男性の生理的はたらきにたいし、女性は「子どもの肉（フィットック）をつくる」といわれる。「女性の腹のなかで男性の血から子どもの骨格ができると、女性の月経（グファル）がとまる」とのこ

とである。つまり、月経が胎児の肉体を形づくる養分になっているのである。このように、生殖においては女性におとらず男性も深くかかわっていると認識されている。

### 血と肉による人間関係

血と肉という生理的物質の結合によって子どもが形成されるという「民俗生理学的説明」は、サタワルの社会関係を把握するうえで重要な鍵になる。その観念は個人が母系親族集団へ帰属したり親族関係を認知する基本になっているからである。人びとは、「おまえの血はどこか」とか、「あなたの肉はだれと同じか」などと相手に問いかける。それには、「おれの血はカタマン（母系集団名）だ」とか、「わたしはイネリーマ（人名）と一つの肉である」というように答える。「血」を問われた場合には、自分の父の母系集団（クラン）名を口にする。つまり、「血」は父から伝えられるとはっきり意識しているのである。一方、「肉」の関係を聞かれたときには、自分の母の名前か自分のクランの名称で答える。「血」と「肉」で親族関係を表わすのは、子ども（個人）の性格や行動などを、第三者がほめたり、揶揄や非難したりするときである。たとえば、男が島のきまりを破って夜にヤシ酒を飲んで大声で騒いだりすると、「あいつの父も大酒飲みであったから」といわれる。また、子どもが啞者や精神錯乱者であったり、特殊な病気（らい病など）にかかったりすると、その原因はそれらの性格や症状特質をもっていた「父方の祖先」とむすびつけて説明される。社会的にマイナスな面だけでなく、若者の航海術やカヌーの建造技術が優れていることをほめるときにもいわれる。その知識や技術は「父の血からきている」というようである。人びとは、そのような個人的資質を血のつながりによって父と子が共有する

ものと考えている。そのほかの場面で、血が話題になるのは、性関係をもつ相手や配偶者を選ぶときである。「同じ血の女を盗んではいけない」という。これは父の兄弟の子との性交や結婚の禁止を意味している。

「肉」が会話場面に登場する一例は、男が魚をとって海から帰る道で婦女子に会ったのに、魚を一匹も与えないようなときである。男がそのような行動をしばしばとると、「あいつの肉は、けちんぼうだから」と非難される。また、女性が隣接する他人のタロイモ田へくいこんでイモを植えたりすると、「その肉の連中は他人のことを考えない」と非難される。ここでいう肉とは、アイナンとよばれる母系の親族集団、つまり母系クラン（氏族）をさしている。このように、肉の場合はあるアイナン（クラン）が集団としても特徴的な性格を表わすのにもちいられる。

それらの用法からわかるように、「血の関係」は個人と父やそのクランの特定の成員、「肉の関係」は母のクラン全体をそれぞれさしている。そして、エウ・チャ（一つの血）ともいわれ、これは父親を同じくする子どもたちを意味する。この「血」で親族関係をいうとき、個人と父方の祖父とのあいだがらは「父の血」と表現される。したがって、「血の関係」は基本的に父—子という二世代間の血縁関係を意味しており、父系的に系譜関係をたどる性質のものではない。男性のクランの人びと、たとえば彼の姉妹が彼の子どもをさすときには、「私たちの血である人びと」という。それにたいし、エウ・フィトゥク（一つの肉）と表現される人びとは、「母親を同じくする子どもたち」、つまり「アイナンの人びと」である。このように、サタワル社会においては、血と肉という生理的物質が親族関係を類別する基準になっているのである。「血」は父と子どもとの血縁関係を、「肉」は個人と母系親族集団との出自

関係を示している。

母系親族集団アイナンに「肉」をあてるサタワル社会では、「血」によって血縁関係をさす別の親族用語が存在する。それがアフアクルである。アフアクルは、母系親族集団とその男性成員がもった子どもとの関係をさす名称である。具体的には、「私はAクランのアフアクルである」とか、「彼は私のクランのアフアクルである」といういかたをする。この用法からもうかがえるようにアフアクルは、個人とその父親の母系親族集団との関係、いかえればそれは個人と集団との関係を明示する親族語彙である。つまり、アフアクルは血縁による関係を表わしており、これは個人対個人でも、集団対集団でもなく、個人対集団の関係である。サタワルの人びとは、自分たちの社会が「血」という人間関係、「肉」という人間関係の網によって構成されていることを意識しながら生活しているのである。

### 3 思春期と性

一九七四年の十二月、私はトラックのフェーファン島のタツオ氏の家に世話になった。タツオ氏に海洋博の展示物を集めてもらうためであった。五十すぎの彼は、母と妻、二人の息子と一人の娘と住んでいた。村を歩きまわっているとき、タツオ氏は、女の人に会うと「ちょっと待っていてくれ」と言っはよく姿を消した。私は彼女から魚とり用の手網を買うための交渉をしているものと気にもとめなかつた。三十分もしてから彼女の家から出てきて、彼女とは若いころにつきあった仲で、「旧交」を暖めてきたのだと事もなげに言った。そのうえ、トラックの男は昔の恋人に会ったらこうするものだと言に教えてくれた。

その七年後に再びタツオ家を訪れると、妻が二人の赤ん坊をあやしていた。タツオ氏の養子であろうと思つたが、聞いてみるとその子はいずれも、彼の娘の子どもであるという。娘エイフォンはまだ十五歳で、子どもを母親にまかせて中学校へ通っていた。二人の子の父親はわからないという。タツオ氏は幼くして母親になった娘のことを「気の早い子だ」というだけで、別段苦にしていなかった。

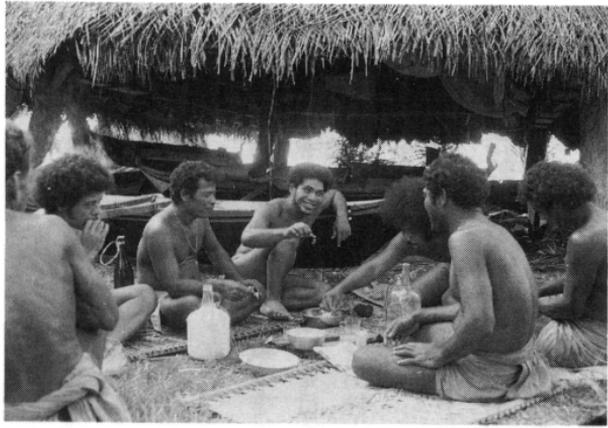
サタワルヤトラックを中心とするミクロネシアの中央カロリン諸島（トラック語系社会<sup>1</sup>）では、思春

期の男女の自由な性行動が認められている。女性の処女性は何ら問題にされず、未婚の母やその子どもが社会的に差別されたり、偏見をもって扱われたりすることもない。結婚後においても、男性は妻以外の女性と「秘密裏に」性関係をもつことに情熱をもやす。<sup>(2)</sup>「性肯定社会」といえよう。<sup>(3)</sup>しかしながら、性的活動に寛容であるとはいえず、この社会の人びとは多くの性的禁忌を守らなければならない。その禁忌は異性キョウダイのあいだに集中している。<sup>(4)</sup>性にまつわる言動がもとで殺傷事件に発展することもあ

### 若者の性行動

サタワル社会の少年と少女は、成人として社会的に認められるまえから性関係をもちはじめた。女性  
は初潮前から、男性は十五歳すぎからさかんに異性との交わりを求める。少女が初潮前から性関係を経験したとしても咎められることはない。ある老女は、少女が初月経を出すためには男と寝なければなら  
ないという。その相手は独身男性とはかぎらず、既婚の男、とくに姉の夫などで、少女は彼らから性的  
な手ほどきをうける。

高校生のセレスティン君は、十七歳であるがすでに性関係をもっている相手がいる。彼はそのことを友人に自慢げに話したりするので、親も知っている。しかし、彼の両親にしろ母方のオジにしろとやかく言わない。まわりの人も「ヤシ縄も作れないのに女のことしか考えない子だ」といって彼を揶揄する程度である。子どもたちが早くに性に目覚めるのは、夜間に両親の性交を目撃したり、兄たちのランデ



若者が雑談する小屋カヌー

ブーの手助けをしたり、若者の経験談を耳にするからである。また、男たちが猥談やうわさ話をするカヌー小屋にいて性についての知識を身につける。大人たちは子どもたちがいる前で性の話を控えることはない。カヌー小屋は女性の立ち入りが禁じられるため、男たちははばかることなく猥談をすることができる。

思春期の男女の性行為は昼間に森で行われる。少年が弟や甥に手紙を託したり、伝言で少女に会う場所を伝える。少女は機織りやタロイモづくりの仕事を母親や姉たちといっしょにするが、その目を盗んで男に会う。父親の姉の家へ行くとか、森の池に水浴びに行くと言って相手の待つ場所へ急ぐ。妹などを連れて森へ薪集めに出かけるときは恋人に会う好機となる。二人はおちあうと、人目につかない木かげや森の作り小屋にヤシの葉を敷いて性行為におよぶ。そのあいだ少年は弟などを見張りに立たせる。

若者が性関係を持つ相手は思春期の女性だけの女性ではなく、むしろ寡婦であることが多い。夫と死別あるいは離婚した三十〜四十歳代の女性のなかには、自分の方から少年を夜に家へ誘うものもある。そうした女性は性そのものを楽しみ、相手をとくに誰とかぎるわけでもない。また、他島から独身女性が訪れたりすると、島の若者は彼女に近づこうとする。私は滞在中に、オレアイ島からきた女性や平和部隊のアメリカの教師が一晚に三人の若者と寝たという話を聞いた。彼女たちが投宿している家の人も若者

の性を目的とする訪問には見て見ぬふりをする。

夫婦間でなく、このような若者の性行動によって生まれた子どもは「藪の中の子」とよばれるが、なら社会的差別をうけることもない。その子を産んだ女性の母系親族集団（クランやリニージ）成員として正当な権利を獲得することができる。

親たちは思春期の子どもたちの性行動には干渉しないが、性関係を禁止する相手については十歳ころまでにはつきり教える。女の子どもには、彼女たちが表敬行動や忌避行為をとらなければならない男性は誰であり、その人とは性関係をもつてはいけないとしつかり覚えさせる。その男性と出会ったり、側を通るときには、女性は彼より一段低い姿勢をとることを義務づけられる。これはアップウオロとよばれ、対象となる男性は実の兄弟や、母系クランの同世代の男性だけでなく、母方交差イトコや父方の平行イトコもふくまれる<sup>(5)</sup>。少年の方も十歳を過ぎるころから姉妹と同じ家に住むことを禁じられ、カヌー小屋で独身男性とともに寝泊りを始める。

#### 夜ばい棒

トラック社会における思春期の男女の性行動は、サタワルよりも積極的である。前で述べたエイフォンの嬢のように、親の知らないところで活発に異性との交渉をもつ。五十年前までは、男性が女性を誘い出すのに「夜ばい棒」が使用されていた。それは先端に精巧な刻みや彫刻を施した一メートルほどの棒である。男たちは昼間、気のある女性に会うと、女性に自分の棒を見せたり触れさせて、その印の特徴をしつかり頭にいれておいてもらう。夜になって人びとが寝しなくなったころ、男は好意をもつ女性の家



若いカップル

へ向う。彼女が家のどのあたりに寝ているかを彼女から聞かなくても、島の人なら独身の娘の寝る場所はほぼ見当がつく。しのび足で目指す家に近づいた男は、娘の寝ている外側に立ち、ヤシの葉で編んだ壁のすき間から自分の夜這い棒を差し込む。棒の先端を彼女の髪にからませてから手で引っ張り、寝ている彼女に合図を送る。

彼女はその棒を握って彫刻が自分の好きな相手のものであるか否かを判断し、好意をもつ男性であればその棒を強く引く。これは、親や姉夫婦たちが眠っているから家の中に入ってこいと合図である。棒を二、三度ゆすると、外へ出てゆくからしばらく待てとのサインである。親に気づかれないように家を出るが、行く先を聞かれたら、「用足しに行く」とその場をいいがれる。母親も年ごろの娘の結婚を望むのでそれ以上詮索しない。しかし、娘のもとへ来る男を好ましくないと思っている母親は、娘のかわりににせの合図をつたえて、誰それが「娘を盗んだ」と家の外へ出てから大声でわめく。それで、人びとの知るところとなり、名前を呼ばれた男は面目を失う。そのような「意地の悪い」母親の仕打ちにおよばなくても、女性には彫刻が自分の好きな男性のものでないとわかると棒を押し返す。これは気がないから立ち去れとの返事である。棒の彫刻や刻みだけでは相手が判断できない場合には、女性は低い声で「誰か」と聞き、それにたいする返事の声で、彼女は自分の恋人か否かを確かめて前述の三通りの合図をおくる。

現在、トラックやモーターロック社会の家はココヤシの葉葺きから、合板やコンクリート製へと変り、

ルーバー式の窓をつけるようになった。家の内部を仕切って個室を設ける間取りも普及した。そのため夜ばい棒の効力は失せてしまった。しかし、若者は夜に恋人を呼び出す方法をいろいろ工夫している。その一つは注射器で、金網を張った窓越しに、水を恋人の顔に直射する方法である。ただし、この方法はねらいを定めて一気に押さないと、水が分散し側に寝ている人にもかかり失敗の度合が大きい。

### 性器変工

サタワルの人びとの性器にたいする解剖学的知識によると、男性の性器は男根と睪丸に大別されるにすぎないが、女性のそれは六つの部分からなり、性器全体はティギーとよばれる。上部の恥丘がポラヌ、小陰唇がフィル、尿道がファイチュチュン（黒い石）、陰腔がバガラワン、陰核がクメレルウン、陰核がアヌウ（神）とそれぞれ区別され、そのうち性交にもっとも重要な役割をはたすのは、小陰唇と陰核であると考えられている。

小陰唇は花卉にたとえられ、その二枚のひだを伸展変工することが女性のたしなみとされていた。現在でも五十歳以上の女性は若いころにこの変工をした経験がある。その変工は小陰唇を引き伸ばして性器の外部にはみだせることである。海で水浴びをするときに、ある種の海藻やサンゴを性器にこすりつけたり、池で水浴するさいに毒性のある草や樹液をつけて小陰唇を肥大させるのである。蜂に刺させたり、蟻に噛ませたりもする。こうした痛みをとまなう刺激をあたえるだけでなく、排尿や水浴のときにも手でひっぱりながら大きくする。いづれにせよ、女性にとっては小陰唇のひだを伸展させ、「ひらひ

ら」の状態にすることが理想である。

この習慣はサタワルからモートロックにかけてのトラック語系社会に共通している。なかでも、プルワット、プルラップとトラックでとくに発達している。三十年前までは、それらの島の女性のなかには、伸ばした小陰唇にさらに穴をあけ、ふだんは耳飾りにするココヤシ殻の飾りをつけるものもいた。彼女が歩くことからからという音が聞こえたという。一方、男性の場合も太くて強靱な性器をもつことが誇りであり、男根を小石ではさみつけたり、ついたりする方法がとられた。

サタワルの男女は、事前に性的高まりをもたらずような愛撫をもちいずに、直接的な交接による性交を好む。男性は、女性が腰布をずらしてあらわにした太腿を見るだけで興奮をおぼえる。とくに、女性が性器周辺から太腿にかけて施したイレズミは、男性に十分な高まりをもたらず。交接をさすことば、フェのほかに性的行為を表わすことばがある。たとえば、女性が「男根を口にくわえてなめる」、男性が女性の「陰腔に舌をさしこむ」、「陰唇を吸う」、「性器をなめる」などがある。ほかに、男性が手で女性の性器に触れる、逆に女性が男根を手淫するといった表現もある。それらの行為はいずれも交接前の余技ではなく、交接を中断して行ったり、夫婦が性交を禁止される期間中それにかわるものとして行われる。前でふれたようにかつては性交の禁止は妻の出産後、子どもがことばを話せるように成長するまでの二〜三年間、夫婦に義務づけられていた。

## 性交の体位

サタワル社会の伝統的な性交体位には、側臥位と、男性が男根で女性性器を打ちながら刺激させ交接する形態の二種類がある。側臥位は男女が向い合って寝ながら抱き合い、足をからませて男性が腰を使う方法である。これは夜、一軒の家に子どもをはじめ、親夫婦、娘夫婦などがいっしょに寝る状況で性交を行わなければならないという住環境に適した体位である。というのは、サタワルの家が土間形式で間仕切がないため、全家族員が一行に頭をならべ各自のゴザの上に横たわって寝るからである。他の家族員に気づかれずに性交をするためには、大きな動作をとらず、声も出さずに行う必要がある。

もう一つの体位の場合は、男性が座り女性が男性の方に股を開いてあお向けに寝る。男性は手で男根を握り、それを女性の性器、とくに伸展した小陰唇にこすりつけたり、陰核を叩きながら刺激をくわえる。この動作を続けているうちに女性の性器から体液が出て音をたてるようになる。女性の興奮が高まり、頂点に達した段階で、男性が男根を挿入し射精する。「ハンマー式」とよばれるこの体位で女性が最高の興奮状態になると、失神して「尿」を漏すといわれる。女性がクライマックスにいたらないのに、男性が射精してしまうのは、男性にとっては恥かしいことで、「女に負けた」と表現される。クライマックスに達しなかった女性は、笑うことによって相手をみさげる。女性はこの体位をもっとも好み、男性と性の強さを競争するのである。

サタワルではこの体位による性交の頻度はそれほど多くないが、トラック社会ではこれがほかの体位より優越している。性関係をもちはじめた男女間では、女性が相手の性的な「強さ」を試すために好んでこの体位をとる。とくに、女性は配偶者を決めるさいに、この体位による男性の性的能力を重視するのである。しかし、婚前に性経験のない最近の新婚女性は、男性に性器を見せることを嫌う傾向が強く

なつてきている。いずれにせよ、男根で女性の性器を刺激する体位は、交接を射精のための行為としており、交接によつて女性の興奮を高めるのではない点に特徴がある。つまり、男根で陰唇および陰核を打つことに性交の第一義的価値がおかれているからである。

側臥位とハンマー式の二体位のほかに、現在では男性上位や女性上位などの方法もとられている。男性上位の体位は、今世紀初頭に島に滞在したドイツのコブラ貿易商や日本時代に日本人が教えたようである。女性上位は、フェナ・ニ・ヤップとよばれ、「ヤップ島式の交接」で、ヤップ人の好む体位をまねたといわれる。また、太平洋戦争中にマーシャル諸島へ行ったサタワルの男が、そこで経験した体位を「ヘリコプター式」と名づけて島の男たちに伝えた。それは女性上位の変形で、女性がおおむけに寝ている男性の男根の上にしゃがんで性交する体位である。男性は女性の性器に男根を触れようと腰をもちあげる。けれども、女性がなかなか接触させないように腰を前後左右に動かしてじらすので、男性は腰をかかせた状態で、ちょうどヘリコプターの翼のように女性の下で向きを変えたり、回転する破目になる。この体位を試みた男性は女性の言いなりで、負けてしまうから「恐しくて良くない」と述べていた。

いくつもある体位のうちサタワルの人びとも好み、多く行なう体位は側臥位である。その体位での交接中に女性の乳房や頸部を吸ったり、噛んだりする。そして、女性はクライマックスに近づくと口を大きくあける。しかし、特定のことばによつて相互に刺激しあうようなことはない。女性は極度に興奮したことを「頭がわれるようだ」と表現する。

## 性的表現の禁忌

サタワル社会では異性キョウダイで守らなければならぬ表敬行動や忌避行為などの多くの規範がある。そのなかでも、性に関することがらやことを口にすることはもっとも厳しい禁忌とされている。性器の部位名称や、性交・抱擁など性行為を表わすことば、愛人、姦通といった婚外の男女関係、さらに排泄についての表現がその禁忌にふくまれる。女性は彼女の男性キョウダイにたいして、太腿およびそこに施したイレズミを見せてはならず、使用していない腰布も目にふれさせてはならない。もちろん彼女は彼らの前でわいせつな歌を口ずさんでもならない。異性キョウダイ間に規定されているそれらの禁忌を破ると、祖霊によってクラン成員に病気や死などの災いをもたらされると信じられている。また、女性が男キョウダイにたいする規範を守らないと、彼らがカヌーでの航海中に災難に遭遇すると考えられている。このように行動規範を逸脱した場合に祖霊によって超自然的制裁があたえられるという信仰はリヤとよばれ、サタワルの人びとの日常的行動を律する基本となっている。

性に関する禁忌のうち、性器や性交を示すことばを異性キョウダイ間だけでなく、対人関係一般において使用することも慎まなければならない。とりわけ、相手の異性キョウダイに関連する性的ことがらを相手のいる場で口にすることはゆゆしい事態をひき起す。私は調査中に苦い経験をした。性や罵倒表現について教えてくれた、私の親友A氏の姉に道で会ったとき、私は「Aは若い娘のことを考えて、あぶないよ」と話しかけたのである（彼は島の共同労働にも顔を出さないため、とかく「怠けもの」とみられているのだが）。軽い冗談のつもりであったのだが、彼女は急に厳しい表情になり、語気を強めて

「内地の人だから許してやるが、そんなことをサタワルの女の前で二度と言つてはならない」と怒つて立ち去つた。私は彼女の形相に圧倒されたが、そのときに初めて、サタワル社会で男性の女性関係を彼の女性キョウダイにたいして語ることの意味の重大さを痛感したのである。

他日、夕方の海岸で七人の男が輪になつてヤシ酒を飲んでいたとき、一人の若者が年輩の男にからんで「おまえの妹の陰核をなめろ」と口にした。すると年輩の男は棒きれをつかんで立ちあがり、若者を殴りつけたのである。まわりの男たちは二人の中に入れて制止しようとはせず、二人はとっくみ合いのけんかを始めた。二人は場所をカヌー小屋に移してお互いにナイフを持ち出し、にらみあいを続けた。この騒ぎを聞いて多くの人びとが集まつてきたが、彼らはただ見守るだけである。それからしばらくして、禁忌語を口にした若者が属するクランの酋長が腰布を三十枚ほど集め、相手の男のクランの酋長のもとに届け、二人の酋長の命令でその喧嘩はおさまつた。悪言を投げかけた男は、それ以後一年間ヤシ酒を作り飲むことが禁止されたばかりでなく、五十ドルの罰金を支払うよう島の酋長に命じられた。

女性間でも彼女の男性キョウダイの性に関する悪言がもとで争いが起きる。女性は誰か(男性)が自分の兄弟の性的悪口を言つたということを耳にすると、かならず仕返しをはかる。悪口を口にした男の女性キョウダイにたいして、彼女はその男の女性関係をあげたり、性的禁忌語をあびせる。つまり、女性は自分の男性キョウダイが性にからむ「恥辱」をうけた場合に、それを発言した男性の女性キョウダイにたいして性的禁忌語を投げ返すことによつて、自分の男性キョウダイの汚名をはらすのである。

異性キョウダイの性に関する発言を忌むという習慣は、トラックやモーターロック社会にもみられる。

トラック社会での日本人言語学者S氏の失敗談を紹介しよう。トラック語研究の第一人者であるS氏は店でフィルムを求めた。彼は、フィルムが日本語からの借用語で、トラック語で「フィルム」と発音することを知っていた。だが、彼は女店員に「フィルムをください」と流暢なトラック語で話しかけてしまった。すると彼女は顔を真青にし店の奥へ逃げこんでしまった。マネージャーが現われ、「おまえはいったいなんてことを言う。彼女の兄弟でもいたら大変なことになる」とどなりつけたのである。S氏は友人にことの顛末を話し、「フィルム」はトラック語で「あなたの陰核」を意味することを知って肝を冷やしたのである。以後、S氏には「フィルム」というニックネームがつけられた。

S氏の場合は、あだ名をつけられただけで難を逃れたが、トラック社会では女性性器の名称を口にすることが原因で殺傷沙汰に発展することがある。四年前に起きた事件はつぎのようなものである。

一人の男(X)が酔っぱらってシンセキの家に乱入した。イトコにあたる男(Y)が酒びたりの彼を叱責したために口論になった。平常心を失ったYは、酒飲みの男に「おまえの姉さんと性的行為しろ」と罵った。ちょうどその家にXの姉がいたこともあって、激怒したXは持っていたナイフでYを刺し殺してしまったのである。この殺人事件は裁判所で裁かれることになった。日系ハワイ人の裁判長は、被告の発言したことばの意味と、それがトラックの慣習法においてどのように位置づけられるのかを理解するために、教育省言語局のスタッフに参考人として意見陳述を依頼した。

参考人に選ばれたスタッフはXとY双方のシンセキであり、自分の女性キョウダイをはじめ多くの親族が傍聴している前で、事件の状況や二者の発言内容をありのまま陳述することにためらいを感じ一度

は拒否した。しかし、彼は事件の場に同席していたことでもあり、裁判長の依頼を承諾したのである。Yの発言の意味は、「小陰唇を吸え」というもので、慣習法では「犯せ」という禁忌語のつぎに「重い罪」になる。その裁判はまだ結審していないが、参考人の意見によるとトラックの男性はそのようなことばを耳にすれば、発言した相手を殺害するのが「当然である」。この事件の場合、争いの場に当事者の姉がいたということも重なって最悪の状況になったのである。男性間で相手の女性キョウダイの性に関することがらを口にするにはトラック語でフィー・フィー・ネー・マースとよばれる。これは「目の中に稲光をおこす」、つまり「目に電光を走らせる」という意味で、男の殺気だった状態を表現する。

男性間で互いの女性キョウダイとの性的行為を連想させる発言は殺傷事件になるが、女性間でも彼女たちの男性キョウダイの「性的悪口」を言われた場合に、それに決着をつけるべき争いが起る。この悪口とは男性キョウダイの性にまつわることを吐くことである。たとえば、相手の女性の兄や弟が「愛人」をもっているとか、女に夢中になっているとか、「惚れ薬」を使っているなどである。<sup>(6)</sup>

女性は、男性キョウダイの性的行動に関することを直接言った相手（女性）だけでなく、他者から間接に聞いた場合でも、発言した相手ないし相手（男性）の女性キョウダイに攻撃的態度をとる。そのことばを言われた女性は相手の女性にたいし、「おまえの小陰唇の花びらが小さいのによくそんなことを言えたものだ」と啖呵を切る。それから、二人はお互いに性的なことばで罵しりあい、最後にはスカートをまくり上げて伸展変工した小陰唇のひだの大きさを比べあう。第三者の立ち会いのもとに、そのひだの性器外部への出具合で二者の勝ち負けを判定する。トラックの女性にとっては、彼女の男性キョウダイが性的侮辱をうけることはもっとも許せないことである。彼らの名誉を回復させるために女性

は、自分の性器を露わにするという、もつとも恥辱的行動をとるのである。ただし、前で述べたように、最近では小陰唇の伸展を美とする考えかたが衰微したため、この種の激しい喧嘩は五十歳以上の女性によつてのみ行われている。

### 婚外性交

サタワル社会においては、男女とも、自分の配偶者以外の異性と特定の期間にかぎり性関係をもつことが認められている。その異性とは、夫にとっては妻の女性キョウダイ、妻にとっては夫の男性キョウダイである。配偶者の同性キョウダイとの性が許されるのは、自分の配偶者が長期間島を留守にするときである。島の男たちは現在でもカヌーで他島へ航海し、その島に数ヶ月滞在する。その期間彼らの妻たちは夫の親の家へ移り、夫の姉妹夫婦や彼のリニージ成員とともに生活する。彼女は夫の独身のキョウダイがいれば、そのうちの一人と性関係をもつことが許される。その場合、夫の実の兄弟が優先される。しかし、夫が帰島すればその関係は終結する。逆に、妻が他島にいるシンセキの病氣見舞などで島を離れているあいだ、夫は妻の姉妹（独身）と性関係を結ぶことができる。

婚外性交を社会的に承認するそのような慣行とは別に、男性はほかの女性と「恋人」ないし「愛人」の約束をし、人目を盗んで性的行為におよぶ。この関係はアマレルとよばれる。男性にとっては愛人をもつことが「自慢」にさえなっている。愛人は他人の妻、寡婦そして未婚の女性である。とくに、男は夫が他島へ航海とか出稼ぎにでている間に、その妻と一時的な愛人関係を結ぶ場合が多い。かつては愛

人関係から夫婦へと発展した例が数多くあった。また、妻の出産後二、三年間夫婦間の性交が禁止されていたので、夫は他の女性と性関係をもつことに積極的であった。

愛人関係は秘密裏に維持されるかぎり問題にはならない。しかし、愛人関係にある男女が性交現場を発見されたときには、当事者および彼らのリニージは社会・経済的に大きな制裁をうけることになる。

それは「他人の女を盗んだ」と表現され、「姦通」とみなされるからである。姦通が発覚すると男女のそれぞれのリニージは、彼らの配偶者のリニージ成員によって多くの財産を没収ないし差し押えられる。男女が二人とも既婚者である場合の姦通は、経済的に悲惨な事態が生ずる。姦通した男のリニージでは、彼の妻のリニージと姦通した相手の夫のリニージの双方から、生活用具、漁具、カヌーなどあらゆる動産類を「略奪」されるからである。リニージの男性成員の姦通によって「被害」をうけた長老の経験では、その日からの料理も作れないので、持ち去ったリニージに謝りにゆき鍋を一つだけ返してもらおう恥かしい目にあつたとも述べていた。

### 性的歎待

サタワルの独身男性は、性を目的で他島へ航海するともいわれる。男たちはカヌーで他島を訪問したときに、その島の未婚女性と関係する。この島の男性と他島の女性との性関係が大らかであるということは、サタワルの「女性の貢献」の慣行からもうかがえる。サタワルの女性たちは、他島からカヌーで訪問してきた男たちに食料を提供し、性的サービスをする。

他島からカヌーで訪れた男たちが滞在しているあいだ、酋長の指示でこの島の女たちは数組に分かれ、カヌー小屋で寝起きしている客人（男）に毎日料理を届ける。女たちは片手にタロイモやパン果の食べものを入った皿を持ち、道中卑猥な歌を合唱して、ねり歩きながらカヌー小屋へ向う。カヌー小屋で、客人の一人一人に皿を差し出すときに、客人にたいし挑発的なしぐさを示す。その挑発ぶりはつぎの歌詞からも知ることができる。

「女性の貢献の歌」

私たちは来るよ 私たちは来るよ

私たちサタワルの女が来るよ

陰核を売りに 大きな小陰唇を集めて

私たちが来たよ

私はカヌー小屋の前へ行くだろう

私の可愛いHさんと会うだろう

私はあの男の口に腰をつかってやる

私は怒るようにひどく腰を振ってやる

するともうあの男の口は淫らな臭がして

あの男のひげはポロポロと抜けるだろう

私はあの男の鼻にすりあげてすりさげて



訪門客に性的踊りのサービス

淫らな臭をすりつけてやる  
私の陰腔の中で 何ていい  
あの男の口なめずりの音だろ

この歌は、女たちがカヌー小屋へ到着して一列になり、客人に食べものを手渡すときにも合唱される<sup>(7)</sup>。客人の一人一人の名前を歌いこみながら、歌詞に合わせて腰をくねらしたり、前後に動かしたり、股を広げて腰布を上下したり、性行为を連想させるしぐさをする。客人がその挑発にのって女の体に手を触れたり、また腰布の下に手を差し入れたりすると、女たち数人がその男をとり囲み、露わにした性器を男の顔に押しつける。その性的攻撃のあとで女たちはゲラゲラ笑う。これは女たちの挑発にのった男が、「サタワルの女に辱しめられた」ことを意味する。男にとってはまことに「不名誉な行為」をしたことになり、評判をたてられるのである。だが、こんどはその島へ行ったときにサタワルの男たちがその男の女性キョウダイによって仕返しされることになる。

客人は訪れた島でこのような性的言動による儀礼的歓迎をうけるだけでなく、その島の女性と自由に性関係をもつことができる。それは客人の甲斐性にもよるが、とくに著名な航海者は女性の方から誘われることが多い。こうした場合、客人と未婚の娘や寡婦との関係が発覚しても問題にならない。しかし、

既婚女性との関係は慎重でなければならない。というのも、姦通とみなされ、乗って行ったカヌーを没収されたり、喧嘩ざたになりかねないからである。

「女性の貢献」という慣行は、他島からの客人に食料を提供してもてなす行為であると同時に、サタル社会において禁止されている女性の性的表現が公の場で許容される機会でもある。前掲の歌詞の内容などは男性キョウダイだけでなく島の男性一般にも、日常生活の場で耳に入れてはならない性質のものである。けれども、他島の男性とのあいだでは何の規制もなく、自由にそして積極的にふるまうことを女性に期待するのである。したがって、この慣行の特徴の一つは、女性が島社会の公的場面では性に関する忌避行動を遵守しなければならないのに、他島から客人を迎えた局面では客人に無礼講的な冗談関係として許されることである。もう一つは、島社会で女性が彼女の男性キョウダイの性的辱しめをはらすことに責任をもつが、その責任は彼らが他島で起こした性にかかわる「不名誉」な言動にも適用される点である。

## 4 結婚と離婚

サタワル島で私の調査助手をしてくれたエロイルク君が一九七九年十一月に結婚した。彼はポナペの短期大学を卒業した二十三歳の青年で、相手は十八歳のナウルマン嬢であった。つい二ヶ月まえには、夜遅くまで遊んで魚とりやパン果採取の仕事をしないうことを母方オジに注意され、彼はカヌーで島を逃げ出したことがある。彼の「夜遊び」の相手は彼女であったようである。

ナウルマンとは一年くらいのつきあい、彼はヤップ島で買った香水や耳飾りを贈ったりしていた。一ヶ月まえに、彼は養母と実母に結婚の意志をあきらかにし、彼の実母の兄にも伝えた。彼と彼の養母の一族（母系クラン）では、この結婚にあたって彼女との関係が「良い」か否かを系譜をたどって調べた。彼女とは母系クランが異なり、彼の父方の親族関係においても、三世代間につながりがないことがわかった。それで、彼の母の兄がナウルマンのクランの酋長に、結婚を申しこんだ。これが婚約（カフオト）である。それから、エロイルク君は、ココヤシや魚をとると彼女の家に届けた。この贈りものは、婚約後の男性に課せられる義務である。それとともに、彼女の家でときどき食事をするようになった。婚約の一ヶ月後、エロイルク君はマツト、禰、山刀、漁具を携えて彼女の住む屋敷（プコス）にひ



牧師の前で宣誓する花嫁・花婿

き移った。二人が夫婦になったということは、島の人びとに知れわたったが、結婚式に相当する儀礼は行われなかった。神父が十二月の船で巡回してきたとき、二人は教会で代父、代母の立会いのもと、「正式な結婚」をした。まず、二人は神父に彼らの両親の名前を告げてから、しばらく離れ、誓いを前に考えこんだ。それから神父の前に進み、宣誓をした。この間、代母が二人に頭飾りをかけてやり、神父が二人に聖水をかけて式は終わった。この式には数人の親族が立ち会っただけである。

エロイルク君の結婚のしかたは、キリスト教を受容してから、島の人びとのあいだで一般化している。一九八〇年に、婚姻規制のために島で結婚できない適齢期の男性は十六人、女性は九人もいた。彼らは結婚できる相手が現われるのを待つか、他島の人と結婚するしか道はない。その点、エロイルク君は恵まれていた。

### インセストと婚姻の規制

サタワル社会には、性関係および婚姻関係を禁止する規範がある。兄弟―姉妹、父―娘、母―息子だけでなく、同一母系クラン成員どうしが性関係をもつことは、エフィニン・ガウ（「もっとも悪いこと」とみなされている。「もっとも悪い」行為をした当事者は島からの追放という制裁をうける。これまでに、三百三十

件の結婚についての事例を収集しているが、同一クラン成員のあいだで起こった性関係と結婚は三件にすぎない。

そのうちの一件、クラン成員の性関係についての例を紹介しよう。その事件は一九七八年四月にヤップ州のウルシー環礁で起きた。そこには中・高等学校があり、各島で八年制の小学校を終え、一定の成績をおさめた生徒が進学する。生徒は寮生活をしながら学校へ通う。一人の年輩者がその島出身の生徒の世話をするために、寮父（母）の役にあたっている。サタワルからは酋長が選んだU氏がその役についていた。当時、男子十八名、女子六名のサタワルの生徒が寮に住んでいた。U氏は、生徒の相談相手になったり、寮の食事に満足しない生徒のために魚をとっては料理してあげたりしていた。それで当初は生徒からの信頼もあつかった。しかし、そのうちに寮の規程や異性交際について話すことがあるといつては女生徒だけを集めて説教したり、彼自身が彼女たちに手をだすようになった。

多くの女生徒から相手にされなくなったU氏は、彼のクランの一人の女生徒をたびたび夜に海岸へ呼び出していた。彼女に性的な要求をするためであった。彼女がそれを拒むと縄で縛ったり、砂浜に埋めたりしたのである。女生徒はU氏が母方のオジであり、彼の言うことに反対することができなかった。彼女には結婚を約束したサタワルの青年がいた。彼は高校卒業後もサタワルへ帰らず、学校の仕事をしていた。女生徒は、自分のクラン成員で母方オジにあたるU氏との性的ことがらを出すことをはばかっていた。しかし、オジの攻撃に耐えられなくなり婚約者に話した。数日後、婚約者と彼の友人はU氏のあとをつけ彼が彼女を海岸で暴行している場を目撃し、U氏を詰問した。その後、U氏は自分の行動を反省し、乱暴しなくなった。

生徒たちがサタワルに帰省する夏休みが近づいたある夜、U氏は船外機のついたボートでトロリーングに出かけると言つて島を離れた。しかし、つぎの朝になつても彼は帰らず、高等学校では近くの島じまに無線連絡し、彼の捜索にあつたが行方不明のままであつた。それから二ヶ月後に、パラオの小島にボートが漂着したという知らせが高等学校にはいった。その情報は生徒を島に運ぶ連絡船によつてサタワルの人びとも伝えられた。U氏のクランの人びとは、そのボートがU氏のものであると考え、女性たちは仮小屋をつくり、十日あまりU氏の死を悼んで泣きあかした。

U氏の事件は他島で起きたために、島からの追放という制裁は実行されなかつた。しかし、彼は自分の犯したことを恥じ、島へも帰れず、自分でみずから死の道を選んだのである、とサタワルの長老は説明してくれた。このような「近親相姦」は、死という結末をむかえるだけでなく、その死者の霊はクラン成員に災いをもたらす存在として人びとから恐れられている。その一年後、彼のクランの男性がパンノキから落ちて、十日後に死亡した。妻の話によると、夫は毎晩のようにU氏の「霊」が夢のなかに現われ、自分の名前を呼んだとのことである。

近親相姦の禁忌は同一クラン成員どうしだけでなく、クランは異なつても父方の平行イトコ（父の兄弟の子）とのあいだでも守らなければならない。その規制は、第一イトコだけでなく、第二イトコまで適用される。サタワルの人びとは「血が三つ離れるまで」性関係をもつたり、結婚してはならないという。この「血」は父から子どもに伝えられるとされ、「血が三つ」とは父系的系譜をたどつて三世代を経ることを意味する。

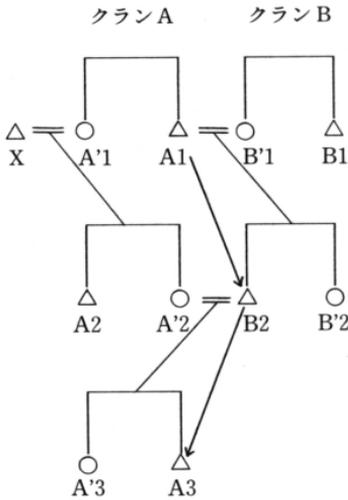
Nさん（女性）は、父方の平行第二イトコ（G氏）と結婚した。この結婚に彼女の母は強く反対し、

Nさんを打ったり、彼女の持ちものをこわした（これは社会関係、とくに家族関係で軋轢が生じたときの典型的な示威行動である）。Nさんは母親が他島へ行った留守中にG氏といっしょに生活を始めた。帰島後、それを知った彼女の母親は、二人が住む家の壁を破ったり、食器類を投げ捨てたりして、二人を別れさせようとした。しかし、二人はそのまま生活し現在にいたっている。この結婚は「心のよくない」結婚とよばれ、モンモートン・ガウ（「いっしょにすわることの悪」とみなされる。彼らの次男と三女が生まれつきX脚のため歩行が不自由である。この身体的ハンディキャップの原因は、両親の結婚にあり、リヤ（超自然的制裁）のせいだと考えられている。

それによつて、父方および母方の交差イトコ（父の姉妹や母の兄弟の子ども）との性関係は、禁止した方が望ましいとされるが、社会的制裁はない。むしろ、状況によっては男性が父の姉妹の娘と結婚することが優先される。たとえば、ある男性が彼のクランで占有する秘儀的知識（ロン）の修得者である、自分の知識を伝授した息子の一人を自分の姉妹の娘と結婚させるのである。これは、男性のクランに代々母系の出自をとおして伝承されてきたロンが父―息子の線にそつて他のクランに流出してしまうのを防ぐために行われる。父方交差イトコ婚は、祖父から孫へと同じ母系クランに所属する二者間で秘儀的知識を伝承させることを可能にするからである（図5）。ロンをとりもどすための結婚は、クランに知識を習得し、継承した男性がいなくなったときに行われる。「ロンのための結婚は強い」ともいわれる。

サタワル社会で性関係と婚姻の忌避を表わすことには、エフィニン・ガウとモンモートン・ガウがある。前者は「たいへん悪いこと」を意味し、近親相姦や婚姻に関してだけでなく、男性が集団漁に出

#### 4 結婚と離婚



註1 知識は矢印のように、AクランのA1→BクランのB2→AクランのA3へと継承される。

註2 △は男性、○は女性、＝は結婚、|は親子、┌は兄弟姉妹の関係をそれぞれ示す。

図5 父方交差イトコ婚による知識の移譲

る前の晩に妻と性関係をもったり、女性キョウダイが男性キョウダイに表敬行為を守らなかったときにもいわれる。そのような社会的規範から逸脱する行為にも、超自然的制裁（リヤ）がともなうと考えられている。

近親相姦とみなされている結婚は現在、八十七組の夫婦のうち二例ある。いずれも、数世代前にサタワルのクランの養子になった他島出身の女性の女系子孫と、彼女を養取したサタワルのクラン成員との結婚である。サタワル社会の養子は養子先のクラン成員になるので、通常はそのクラン成員との結婚は禁止される。しかし、それら二例の場合は、他島出身者の子孫という条件が考慮されて結婚が許されたものである。また、モンモートン・ガウツマリ、父方平行イトコどうしの結婚は前述の一例のほかにも二例ある。その二例はいずれも親どうしが養子関係によるキョウダイである。他方、「禁止したほうがよい」とされる交差イトコどうしの結婚は十三例ある。

## 伝統的な結婚

エロイルク君の例で述べたように、現在の結婚は教会で神父の主導のもとに行われ、それが「正式の結婚」とみなされている。キリスト教受容前には、男性（婿）側と女性（嫁）側で食べものを交換することによって結婚を社会的に承認していた。

一九五〇年当時、人口三百人ほどの島では、結婚可能な適齢期の異性は数人程度のものである。交際中、男性は恋人の気をひくために、ウコンや鼈甲製の腰帯などを彼女に贈る。これはムマル（秘密の贈りもの）とよばれ、男性が他島から入手したものである。長老が「自分で歩いて女を探したほうがよい」と語っていたように、結婚は本人の意志で決められる例がほとんどである。ただし、男性と女性の双方の母親が話しあって結婚させたり、幼児婚約による結婚もあった。

若い二人の意志が固いとなると、男性の母方オジは女性のリニージの族長に結婚を口頭で申し込む。これがカフォト（婚約）である。そのさい、品物の贈与や儀礼はない。婚約後、男性は相手の家にウコン粉を贈ったり、ココヤシや魚などを届ける。彼はときどき女性の家で食事をとるようになる。この形態が数ヶ月続くと、男性は女性の家にひき移る。そのとき男性は新しい褌を身につけ、頭に花飾りをつけるくらいなもので、特別に着飾ることもなく、母方オジに連れられて女性の家に行く。女性の両親は娘夫婦の寝る家を用意する。空いている家がないときは、新しい家を建てるまで親夫婦と同居になる。土間形式の家の両端に二組の夫婦が分かれて寝る。

婿が嫁の家に移り住む日かその翌日に、婿のプッコス（屋敷）に住む人びとは朝から食べものづくり

にとりかかる。男たちは全員で漁に出て魚やタコをとり、女たちは普段より入念に多くのタロイモを料理する。料理ができあがる夕方、婿のリニージ成員、屋敷に住む人や加勢した人が全員、一人一皿の料理を手にして嫁の家に出かける。道中行列をくみ、口ぐちに「結婚の御馳走だ」と叫びながら行く。五十以上の洗面器大の木皿や容器に盛られた料理が嫁方に贈られる。嫁方のプッコスの人びとは、道に待ちぶせておりその行列が近づくと、その料理を奪うようなしぐさでうけとる。食べものは嫁の屋敷に住む人びとだけでなく、そこから婚出している男性成員や嫁の父のリニージにも分配される。婿側からの食べものが届けられると、嫁側でも数日後に料理づくりに励む。婿側から受けとった皿に食べものをつめて、婿のプッコスへ返す。婿側と嫁側とで用意した食べものは、それぞれのプッコスの住人によって別々に食べられる。双方の一族や親族が集って花嫁と花婿の結婚を祝ったりする儀礼はない。

### 夫としての男性の地位

結婚後、婿は嫁のプッコスで生活する人びとのために食料獲得の仕事に従事する。婿は働くために「飛んできた男」とよばれる。結婚二〜三ヶ月もすると、婿の両親は彼に小区画のタロイモ田とココヤシ林を分け与える。タロイモ田は彼の妻が使用、管理し、ココヤシ林は彼自身が責任をもつ。その田と林は、妻へのニッフアン（贈りもの）とよばれるが、実際には「彼の食べものをうる」ための土地である。この贈与がないと、婿は妻のリニージの人びとから「ここにはおまえの食べものはない」と言われたりする。贈与された田と林が、妻のプッコスにおける夫、つまり「飛んできた男」の地位を確保す

る手段になっているのである。

彼は日常生活において、妻のプウコスに住む年輩男性や女性族長の指示に従って活動する。それらの指示がないときでも、妻の意志にそう行動をしなければならぬ。生産活動だけでなく妻の機織り具の修理、糸をとるハイビスカスの伐採、屋根材にするココヤシの葉の収集、妻が飼うブタの飼料集めなどを妻といっしょにする。妻の身体の具合が悪いときには、水浴びにつきあったり、葉草を摘んだりもする。夫は妻だけでなく、妻の兄弟にも気をつかう。彼らが妻の屋敷や家へ顔を出したときなど、敬語を使い、一段と低い姿勢をとって丁寧にもてなす。自分がたばこをもっていけば率先して差し出す。新しく手に入れたつり針や漁具を貸して欲しいと言われれば断われない。学校の教師をしている男性は、給料をたいて購入したラジカセを妻の弟にねだられ、手ばなしてしまった。

夫と妻の男性キョウダイの関係はコウルとよばれる。男性にとってコウルの関係にある「義理の兄弟」は、彼より目上の人にあたるので、男性はその指示に従順であらねばならない。品物の要求にかぎらず、ロンとよばれるさまざまな秘儀的知識の伝授を要求されれば、男性はコウルに教える義務がある。ロンは通常リニージの占有知識とみられており、父・息子、母方オジ・姉妹の息子へと伝授・継承される。しかし、義理兄弟（コウル）からその知識を求められたとき、断わったりすると、男性は離縁させられることになる。

男性（夫）が妻のリニージのパンノキヤココヤシを切り倒し、カヌーや家をつくる時、妻と妻のリニージの族長の許可を得なければならぬ。妻のプウコスに住む人びとが食べる魚をとるために小型カヌーをつくるのであっても、夫は勝手に妻のリニージの財に手をつけることはできない。また、妻のク



ココヤシをとる若者

ランがカヌーを建造するときには、木の伐採から用材のくり抜き、船体のはり合せ、腕木の装着にいたる一年あまりの作業に全面的に協力しなければならぬ。この大きな事業は、妻のクランの酋長の指揮のもとに実行される。そのクランに舟大工がいなない場合には、他のクランの大工に依頼する。大工への謝礼は、腰布百枚のほか、米十俵、カンヅメ三ケース、手斧、ウコン粉、木綿布など、購入した品物があてがわれる。それらの購入代金は千ドルにのぼり、妻のクランに婚入した男たちが中心になって調達する。

サタワル社会の男性は、婚姻を契機に異なる地位につくことになる。男性は自分のリニージにおいては、リニージの財を監督する立場にあり、また女性キョウダイや彼女の夫たち、子どもたちにたいし權威をもつ。他方、自分が婚入した妻のリニージにおいては、「よその男」として妻の男性キョウダイや上位世代の男性の支配下におかれ、妻のリニージのために「働く者」としての地位に甘んずるのである。

## 離婚

一九三一年から六年間サタワル島で調査した土方久功の資料によると、その間の結婚と離婚の件数は、結婚九十六組にたいし、五十九組にのぼる。その当時の人口は約三百人<sup>(1)</sup>で、夫婦の数は六十組から七十組のあいだである。しか

し、現在は教会によって離婚が禁止されている。一九五三年に、神父はそれから三年前、つまり一九五〇年当時に配偶関係にあったものを「正式の夫婦」と認め、それ以降特別な理由がないかぎり離婚を許さないという方針をだしたからである。私の調査資料によると、一九五三年以前に結婚し今でも生きてゐる人の結婚回数は、男性で平均三・六回、女性で三・一回である。初婚のまま現在にいたつてゐる夫婦は三十四組中、十三組にすぎない。男性のなかには六回、女性では五回の結婚経験者もいる。

一九八〇年の段階で、長期間別居してゐる夫婦は四組あり、人びとはそれを「離婚と同じ」と考へてゐる。その別居は、夫の精神障害、夫の盜癖、夫が自分の島（他島）へ行つたきりというものと、もう一つはつぎの理由からである。ティプエは一九七二年に、母方オジが死亡したため、その妻の「夫」になつた。当時、彼は二十七歳、妻は六十二歳であつた。彼は結婚はしたものの別居をしたままでゐる。彼には夕方に女性が池で水浴びするのを隠れて見てゐるといふわさがたつてゐる。また、彼が目をかけていた甥と姪が相ついで急死したときに、その死因は彼が妻と暮さないからだと言われたりもした。ティプエは妻と別れたいが、その自由もない教会のやりかたを批判してゐる。教会の方針により離婚が規制されている現在、彼にかぎらず、いやいやながら夫婦生活をつづけてゐる人もかなりゐる。現在、夫婦間で不和が生じた場合、ふつう別居をするしか方法がないのである。

#### 伝統社会の離婚

夫婦間で離婚へと発展するような軋轢は、相手の異性関係、夫の怠惰、妻の性格などが主な原因である。夫が魚とり、ココヤシの液汁採取、コプラづくりや下刈りなどの仕事を怠けてゐると、妻は夫に警

告する。夫がそれを無視すると、妻は夫に「出ていけ」と言う。すると、夫は身一つで彼の生家ないし養家に帰らなければならぬ。二三日のうちに、妻のキョウダイや母方オジが仲裁にはいり、元どおりにおさまることもある。それにたいし、妻は夫が女性と性関係をもっていることを知ると、夫に「おまえのプウコスへ帰れ」と告げる。これは妻が夫と離婚を決心してから口にするこゝろである。それを言われた夫はいいわけもできず、身のまわりのもので道具類をもって、自分の家へ帰るしかない。いづれも、妻が夫を追い出すかたちではあるが、「あなたのプウコス」という表現をとつたら、二度と夫婦生活をおくれない、離婚を意味している。

サタワル社会での離婚は、妻が夫を追い出すにしろ、夫がみずから妻のもとを離れるにしろ、別居という段階を経てから成立する。先に再婚する方が前の配偶者ないしそのリニージに腰布を三十枚払えば、二者の離婚は社会的に承認されることになる。男性はつぎの結婚をするときに、自分の姉妹をはじめリニージの女性に頼んで腰布を集め、先妻ないし亡妻の家に届けてもらう。女性が先に再婚する場合には、女性の方から腰布を先夫のもとへ贈る。この離婚の代はルワルとよばれるが、それは別居と同時に支払われることはない。ふたたびいっしょに生活する意志がなくてもある期間をおいてからルワルを払うのが習慣である。浮気が離婚の原因であったとしても、このルワルは浮気をした配偶者が相手に支払う「慰謝料」ではない。

妻と死別した男は自分のリニージに帰る。しかし、まわりから彼女の女性キョウダイとの結婚を勧められ、それを認めると妻のリニージに留まることができる。これは木の葉が落ち新芽が出ることにたとえられ、「子どもを支える結婚」とよばれる。亡くなった妻とのあいだにできた子どもを育てることを

意味している。<sup>(2)</sup> 男のリニージでも結婚時と子どもの誕生にさいし、妻方に財産を贈与してあるし、離婚の支払も不要であるのでその結婚を優先させる。それにたいし、夫が死亡して妻が再婚するときには、その支払の必要はない。夫の死亡の場合も、夫の男性キョウダイがその妻の「後夫」になることが好まれる。この結婚は「よく知ったあいだがらの結婚」とよばれ、弟が兄の妻とその子どもの面倒をみるからだと説明される。この配偶者の死によって払われるルワルは、夫側だけに義務づけられていることから、夫が妻のクランから「籍」を抜くための離婚の代としての性質が強い。

別居期間中は、依然として「夫婦関係」が存続しているとみなされ、冷却期間において双方が同居する、つまりよりをもどすための仲裁がはかられる。それと併行して、男女ともつぎの結婚をすべく、相手をみつけ、性的な関係をもつことが多い。新しい相手と結婚する意志のもと、ルワルも払わずに性的関係もち、その現場を発見されたりすると、「姦通」ないし「重婚」とみなされ、前の配偶者のリニージ成員から、全財産（動産）を没収される事態をひき起こす。とにかく、サタワルの離婚は、先に再婚する方が元の配偶者にルワルを出すことで成立するのである。サタワル語で離婚をさすことばは、ムウエイ・フェサンとよばれ、「(紐のようなものを)引きちぎる」という意味である。

#### 浮気による離婚

ワキンは一九三八年に祖母のすすめで結婚した。妻ネマオにはタロイモ田一区画（五十坪）と二百本のココヤシが生えている土地を贈与した。結婚から三ヶ月たったころ、彼は日本軍の飛行場建設のためオレアイ環礁に出かけた。ココヤシを切り倒し、石を敷く仕事をして、八ヶ月後に島へ帰った。その間、

妻ネマオはワキンのプウコス（屋敷）に移り、彼の祖母といっしょに暮っていた。島に帰ったワキンは妻のプウコスで生活し魚とりやココヤシ集めに精を出した。ある日、漁から帰り、家にいた妻に「私の食べものは」と聞いた。彼女は、「あなたの食べものはここにはない。あなたのプウコスで食べなさい」とつれなく答えた。これはワキンへの「離婚宣言」を意味していた。彼は祖母にそのことを話し、彼のクランの集会所で寝ることにした。

祖母はネマオがワキンの留守中に、ウルピーと夜に密会していたのを知っていたが、ワキンが戻ればその関係も終わると考えていた。しかし、ワキンが妻から追い出されたと聞いては、そのままひきさがるわけにはゆかなくなった。祖母はネマオの行状を調べることにした。ワキンが追い出されてから数日後に、彼女は森の小屋にネマオとウルピーがいるのを見て、「エーホッホー、ウルピーがネマオを盗んだぞおー」と大声で叫びながら村へ帰った。これを聞きつけたワキンのプウコスの人びとは、ウルピーのプウコスに押しかけ、手あたりしだいに、鍋、布、ゴザなどを奪い、カヌー小屋で小型カヌーを没収した。この事件のあと、ネマオはウルピーといっしょに生活し、二人の子どもを産んだ。戦後まもなく、ウルピーはラモトレク島の彼のクランに男性酋長がいないうことでその島へ渡った。そのためネマオと別れ、ラモトレク島で妻をもらい、四人の子どもをもち現在にいたっている。ウルピーは、彼の妻と子どもに贈った、タロイモ田、パンノキ、ココヤシ林を、彼らに与えたままで離婚した。

他方、ワキンはネマオと離婚してから、二週間後に彼女の妹を二番めの妻にし、ウルピー・ネマオ夫婦と同じプウコスに住んだ。彼は一九四一年にパラオへ出稼ぎに行き一年間滞在した。ワキンがパラオの女性と一緒になったという話をパラオ帰りの人から聞いた彼の妻はほかの男と再婚した。ワキンはパ

ラオ語が話せ、パラオの女性と関係した事実があったようである。ワキンが島へ帰ったときに、彼の妻が離婚の代を払うと言い、ワキンの女性キョウダイもそれをとるように勧めた。しかし、ワキンは自分にも非があるし、妻がパラオでの彼の結婚を事実と置いていたからという理由で、それを受けとらなかった。ただし、この二度目の離婚のときには、彼が先妻に贈り、二番めの妻が使用していたタロイモ田とココヤシ林はとり返した。

ワキンは二度の結婚に失敗したことになるが、最初の離婚は妻の浮気によるもの、つぎの離婚はうわさとはいえ、彼の女性関係によるものである。最初の離婚では妻が先に再婚したが、ルワル、つまり離婚の代償は、支払われなかった。それは彼のクラン成員が妻と関係をもった男性のクランの財を没収したし、彼が妻の妹と再婚したからである。ワキンは子どもがなかったので妻に贈与したタロイモ田とココヤシ林はとり返したが、子どもがある場合には、ウルピーのように妻と子どもに贈与財を残して離婚するのである。

#### 夫の怠慢による離婚

イキポは一九四二年にネカウと結婚した。ネカウは気の強い女で、イキポにココヤシの採取、ココヤシ林の手入れ、魚とりなどの仕事をするようにと、口やかましかった。イキポは嵐鎮めやパンノキの豊穡、航海者の歌や踊りなどの知識を修得することに興味をもち、母方オジや島の長老のところに出かけ、ヤシ酒や魚を買いでは伝授をうけていた。そのため、彼は妻の指示に従わないこともあった。彼らには三人の子どもがあり、末の子が三歳をすぎたときに、彼は妻から「あなたは出てゆきなさい」と言われ、

彼のクランに帰った。妻の言い分は、イキポが夫としてしなければならぬ仕事をせず、彼女の願いを聞かなかったからだというものである。サタワル社会では、妻は夫に、たとえば「魚をとってきて欲しい」という要求を四度したにもかかわらず、夫がそれにこたえないと、「出てゆけ」とのことばを口にする。この四回目の要望を夫が聞きいれないと、妻は夫を別居ないし離婚させる権利を行使できるのである。ということは逆に、妻が夫の気持を理解してくれないとか、夫が妻の性癖に耐えられない場合、夫にすれば妻の要求を無視しつづけることで、別居ないし離婚が可能になる。つまり、夫は妻に愛想をつかしたら、妻に三下り半を「言わせる」状況をつくって、「妻の意志」によって離婚することができるのである。イキポは二年ほど妻と別れていた。その間、妻の母やオバがもとに戻るように勧めた。しかし、彼は妻との生活を続ける気にはなれなかった。妻は怠けもののイキポを嫌い、再婚したので、彼も二度目の結婚にふみきった。彼は再婚にさいし、妻と子どもに与えたタロイモ田、ココヤシ林をとり返さなかった。イキポは、現在でも娘の家に顔を出しては物品をあげたりしている。

イキポの離婚の原因は、彼が妻に非協力的であったことからであるが、結局は夫婦の「性格の不一致」ということなのである。けれども、離婚後の父子関係は避けるべきものでなく、親密な関係を維持しつづける性質であることがうかがえる。

## 姦通

サタワル社会で「姦通」に相当することは、ア・モロウは「盗みをはたらく」という意味である。モ

ロウは「盗み」一般をさすが、目的語に人名がくると、婚外性交の意味になる。婚外の性関係が離婚に発展するとはかぎらないし、また現行犯で捕えられても制裁を受けないこともある。社会的制裁をとまなう性関係、つまり姦通は、相手と結婚する意志のもとに行う婚外性交、特定の間人関係にある人の配偶者との性関係が発覚したとき、ないし婚外性交により子どもができた場合などである。

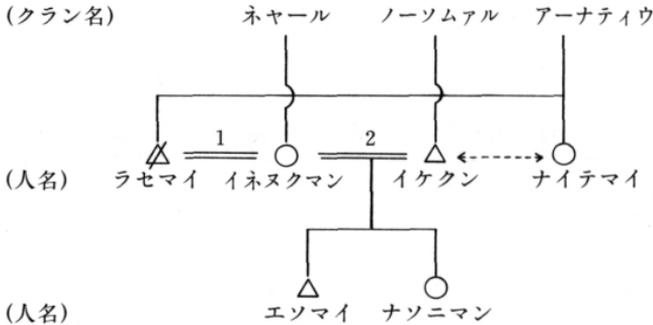
制裁をとまなう姦通で、最近の例はつぎのようなものである。サタワルの青年が一九七六年にエラート島の女性と結婚し、妻の島に住んでいた。彼はその島で、妻とは別の女性とも性関係をもっていることが発覚した。彼は妻のもとへ帰る意志がないのに、離婚の代を支払わずに、その女性と暮した。数ヶ月後に、彼は船乗りになるため島を出た。彼は一年ほど連絡船に乗っていたが、船を降り現在までサタワル島で生活している。彼のとつた行為は、最初の妻のクランの人びとに、彼のクランの財を没収する権利をあたえたことになる。そのために、彼の母親をはじめクランの人びとは、連絡船がくるたびに、エラート島から財を奪うために人びとが来るのではと戦々恐々としている。この青年の姦通事件は、他島で起きたために即座の財の没収という事態にはいたっていないが、サタワル島でそれが発覚したら、彼のクランの動産はことごとく妻のクラン成員に奪われてしまうという。

教会の方針で離婚を認めないという現在の状況のもとでは、財の没収事件へと発展した例は、その例よりほかにはない。ここでは、一九五三年以前に起きた姦通のいくつかを紹介しよう。

### 重婚につながる姦通

ノーソムアル・クランの男、イケクンはネヤール・クランの女性イネヌクマンと結婚し、一男一女を

4 結婚と離婚



註1 △は死者を，数字の1，2は結婚の順序を表わす。  
 註2 ←→は姦通した関係を示す。

図6 姦通と重婚

もうけていた(図6)。一九四七年ころに、彼は仕事のため半年間島を離れてオレアイ環礁ですごし、帰島後も、妻のもとへ帰らず自分のカヌー小屋で暮らしていた。そのあいだに、彼はアーナティウ・クランのナイテマイと結婚するつもりで性関係をもった。イケクンはナイテマイと幼児婚約をした男性が他の女性と結婚したので、彼女が可哀想に思ったからだという。彼のクランの人びとはそのことを知らずにいたが、妻のクランの成員はイケクンが夜、ナイテマイと歩いているとの情報をえていた。ある日、彼らが森にいる現場をネヤール・クランの女性に見られてしまった。ネヤールの人びとは妻であるイネヌクマンに離婚の代を支払わないで、ナイテマイを「盗んだ」、つまり「姦通」をしたという理由で、彼のプウコスへ押しかけた。

ネヤール・クランの女たちは、イケクンのプウコス(屋敷)へ走っていき、家の中にある衣服、寝具、炊事小屋の料理用具や容器を、男たちはカヌー小屋にあるカヌーや漁具などを手分けして「略奪」した。この略奪には大人だけでなく子どももくわわる。みんな大声を出しながら、目の色をかえて、手あたりしだいに物をとる。窃盗団が人目を気にせず、あらゆるものを盗みとるといった光景がくりひろげられるのである。このとき、イケクンのプウコスにいたのは、老女と幼児だけで大人たちはタロイモ田とココ

ヤシ林へ出かけていた。彼らがネヤールの人びとが「差し押え」をしたというのを聞いてプウコスへ帰ったときには、目ぼしい品物が奪われてしまっていた。その情景を、イケクンのクランの長老は「プウコスの端から端まで見渡せた」と表現していたが、別にイケクンを非難してはいなかった。このような事態はしかたがないと思っっているようである。

それから、ノーソムアル・クランの人びとは、男性成員の婚出先や女性成員の夫たちのクランから腰布などを調達してもらい「南京箱」に腰布を五十枚、綿布三十枚（一尋の長さのもの）をつめてネヤール・クランのプウコスに届けた。これはアリヤとよばれ、「謝罪の支払い」を意味する。男側のクランが奪われた品物は、おもなものだけでも蚊帳三帳、毛布四枚、腰布三十枚、鍋、釜、手斧、斧、釣糸、釣針の入った漁具入れ箱と手漕ぎカヌー三隻などである。このほかに、帆走用大型カヌーの一隻には「差し押えの標示」をつけられた。姦通の相手方、ナイテマイのクランが持ち去られたものは、手漕ぎカヌー二隻、漁具入れ箱二個、蚊帳一張り、綿布十枚などである。ネヤール・クランの女たちは取るべき品物が少なかったため、このクランのタロイモ田へ走り二区画に差し押えの標示をかけた。それにたいし、アーナティウ・クランでは南京箱に腰布三十枚と綿布二十枚をつめアリヤとしてネヤール・クランに支払った。それらの品物は、通常島の第一酋長のもとへ届けられる。彼が双方の当事者クランの仲介にあたるからである。この事例では、差し押えをしたクランが第一酋長を出すクランであったためにそのクランへ謝罪の品々を直接届けたのである。

二つのクランからの謝罪の支払いにたいし、ネヤール・クランは、ノーソムアルへ鍋二個を返し、大型帆走カヌーの差し押えを解いた。鍋はノーソムアルの人びとが、煮沸具がなく料理をつくれなから

#### 4 結婚と離婚

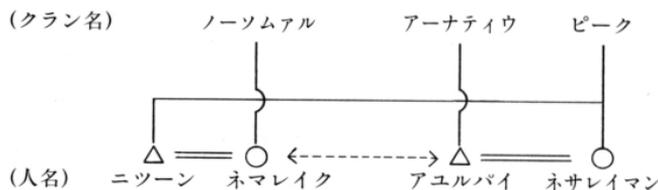


図7 妻の兄嫁との姦通

との理由で、返却を懇願したといわれる。アーナティウには、タロイモ田二区画にかけられていた差し押えの標示を外した。

この事例は、男性が正式な離婚の手続きをせずに結婚を前提とした婚外性交を行い、その現場を発見された場合に起きた、財の没収および差し押えの実際を示している。自分のクランの男が妻以外の女性と関係をもっている場合、そのクラン成員はふつう妻のクランの差し押えを予測して重要な品物を保管するなどの予防策をとる。しかし、ノーソムアル・クランの例では、その対策を講じなかったために品物をことごとく取られてしまい、その日からの料理づくりにも困る状況になってしまったのである。

##### 妻の兄嫁との姦通

男性と妻の兄弟との関係、つまり義理の兄弟関係は、前述したようにコウルとよばれる。男性はコウル（妻の兄弟）にたいし敬語をもちい、表敬行動をとることが義務づけられ、またコウルの指示に従順でなければならぬ。

アユルパイにとって妻の兄ニツーンはコウルにあたる（図7）。アユルパイは「乱暴な男」という世評があり、妻ネサレイマンとの結婚が三度目である。ネサレイマンは夫が兄嫁のネマレイクに夜ばい（テファル）をかけたといううわさを耳にし、兄のニツーンに告げた。ニツーンは、コウルの妻を盗むとは許せないと怒り、アユルパイにつきのように言った。「私の妻が姦通したなんて

聞いては、今にも家（ブッコス）に帰ってしまふところだが、相手が妹の夫のおまえだと聞いては、もうなるまい」と。コウルにあたるニツーンから責められたアウルパイは、妻の密告に腹をたて、その仕返しにネマレイクと結婚したのである。このアウルパイの姦通は、妻の兄（コウル）の妻を奪うという、コウルを侮辱する行為である。そのうえ妻ネサレーマンに離婚の代を支払わずにネマレイクといっしょになったわけで、重婚にもあたる。このコウルの妻との姦通および結婚によって、アウルパイのクランは大きな「損害」をこうむることになった。これは一九四五年十月に起きた。

先妻ネサレーマンがアウルパイからとったものは、現金五円、大型南京箱、蚊帳二張、置時計であり、ニツーンがネマレイクの家から持ち去ったものは、蚊帳一張と毛布二枚である。そのほかに、ネサレーマンとニツーンのクラン成員は、アウルパイのクランから小型カメラ一隻、大型帆走カメラ一隻、腰布三十枚を、ネマレイクのクランからは小型カメラ二隻、釣り糸百尋、漁具の入った箱二つをそれぞれ没収した。

#### 姦通による子ども

一九四四年から数年間、サタワル島にはオレイアイ環礁から避難してきた人びとが五十人ほど滞在していた。彼らは日本海軍がオレイアイに飛行場を建設したために、強制的に移住させられたのである。サタワルの酋長、イグオトはオレイアイの一人の女性Aとひそかに性関係をもっていた。彼女と最初に関係をもったのは、彼の妻ネサップが長男を産んだ直後であった（当時、サタワル社会では、子どもの誕生後から子どもが話せるようになるまで、夫婦間での性行為は禁忌であった）。イグオトの女性関係につい

て、妻はまったく気がついていなかった。イグオトと関係をもったAは、一九四八年にオレアイに帰島後、男児を出産した。その子はイグオトとのあいだにできたものである。彼女の出産の知らせを聞いたネサップは気分を害し、イグオトにきつくあたった。ネサップのクランでも、子どもができたことをAがオレアイへ帰ってから知ったので、イグオトのクランの財を没収することができなかった。一九五〇年ころ、Aはサタワルのネサップのところへ「賠償の品物」として、腰布を五十枚もってきた。しかし、ネサップはその品物を受けとらずに、子どもをひきとることを要求した。ネサップの剣幕に抗しきれず、Aは子どもを手離すことに同意した。その男児アイマイは、小学校に入学する年齢、六歳のときにサタワルへ来て以来、ネサップの子として育てられた。彼はサタワルの女性と結婚し、一人の息子をもうけている。

賠償のからむ姦通の事例をみてきたが、その動機は「失恋」した女性への同情、妻への報復、妻との性交の禁忌によるものである。土方は、一九三一年から六年間に姦通が原因の家財没収事件を十二例も報告している。<sup>3)</sup> 私もそれらとは別に五つの事例を得ている。このことから、キリスト教の規制をうけるまえには、多くの姦通事件が生起していたことがうかがえる。そのような事件の当人にたいして、非難したり、特別な制裁をくわえることもなく、「気をつけないやつだ」とクラン成員からみられるにすぎない。ただし、姦通をした人の靈魂のなかには、死後、「悪神」の住む世界へ行くものもあると考えられていた。キリスト教後、出産後の夫婦の性交禁忌、月経や男性の漁労にまつわる性のタブーなどが放棄され、その面での夫婦間の性行動は自由になった。しかしながら現在でも、老若をとわず既婚男性

のなかには、妻以外の若い女性に接近することに関心をもつものが多く、私は再三にわたり「避妊具」を日本から送るよう頼まれたことがある。

## 5 死と儀礼

サタワルの人びとは一九五三年にキリスト教（ローマン・カトリック）をうけいれてから、教会を建て、朝夕に礼拝を欠かさない。島に神父は常住しないが、一年に数度連絡船で訪れては、結婚式や洗礼などの儀式を行っている。毎日の礼拝や日曜日のミサは、島出身の助祭の手による。人びとは「テューウスの神」を信じ、イエス・キリストの教えにしたがい、十字架を手にサタワル語で賛美歌を合唱している。

キリスト教を受容するにあたっては、かなりの抵抗があった。神父の教えにひかれつつも、昔から人びとを守ってくれた神がみを「悪い神」とみることができなかった。しかし、すでにキリスト教に改宗したよその島へ行くと、その人びとからさげすんだ目でみられるようになった。教会でお祈りしても、島の神から何の祟もなかったし、男たちが月経中の妻と一つ家で寝ても悪いことは起きなかったことを耳にした。サタワルにもアメリカ時代になってから、キリスト教に改宗した女性が数人ではあるがいた。一九五〇年代にはいると、酋長たちは、恐る恐るではあったがまず月経小屋と産小屋を壊しにかかった。どんなことが起こるか様子を見るためであったという。パン果の豊穰儀礼もやめてみた。つぎの年はパ

ンノキにたくさんの実がついたという。それで、酋長たちはすべての人びとにキリスト教を受けいれるように命令したのである。

集団改宗から三十年あまりすぎた現在、サタワルの人びとの宗教生活は、伝統的宗教観念である「多神論の世界」から、キリスト教の「一神論の世界」へと移行したかに見える。<sup>(1)</sup> タロイモヤパンノキの豊穡、魚の豊漁、嵐鎮め、病氣払いや航海の安全祈願など、人びとと神がみが交流してきたほとんどの儀礼は放棄されてしまった。また、生産活動に関するタブー、性や女性の月経・出産のタブー、病氣や死にまつわるタブーなど、人びとのあらゆる行動を律していた規制も解除された。人びとは危機にさいしても、また幸運を求めるときでも、聖書のことばを唱え十字をきれば、願いがかなうと信じているかに思われる。しかしながら、日常的な生活行動においては「敬虔なクリスチャン」であるサタワルの人びとも、病氣や死に直面し、自然の災いに遭遇したときには、複雑な対応ぶりをみせる。まず、私の調査中に起こった不幸な出来事にたいして、島の人びとがとった「複雑な対応」のいくつかを紹介しよう。

## 災いと現在の解釈

一つは、木から落ちて死亡した男性の死因をめぐる人びとの解釈についてである。

ルーコは五十歳すぎの男性で、ココヤシの液汁採取中に足をすべらせ、大けがをした。酒をしたたか飲んだあとでの、木登りであったらしい。肋骨を折り、腹部がふくれあがり、保健夫の処置のほか、長

老が伝統的医療の知識にもとづいてマッサージをし、薬をあてえた。彼の妻や近親の女性は、教会に足しげく通い回復を祈った。その甲斐もなくルーコは、十日後に亡くなった。死ぬ数日前から彼の夢のなかに、一年前に亡くなった母方オジの死霊が現われたという。そのオジは近親相姦のタブーをおかし、自殺した男性である（第4章参照）。ルーコの妻は、夫のオジの死霊がアヌウ・プウット（神・悪）になって夫のグヌウ（靈魂）を呼びにきたのだと考えた。彼女は「悪神」を追い払う儀礼をすれば、夫を救える伝統的方法を知っていた。しかし、その「悪神」がタブーをおかした夫のオジの死霊であり、またその方法が教会の教えに反することもあり、誰にも話せなかった。死霊を追い払う伝統的方法は、巫女が自分の守護霊を憑依させ、守護霊の託宣にしたがって病人とともに近親者が「呪薬」を共飲するものである。彼女は巫女に依頼すれば夫は死ぬことはなかったと悔やんでいた。

つぎは、同一クラン成員の相つぐ死にたいする人びとの考えかたについてである。

一九七九年十月十七日と十八日に二人の女性が亡くなった。二人とも同じクランの成員で十七日に死亡したのは長患いをしていたラクプマイという老女であった。その翌日に死んだのは、三ヶ月前に彼女の看病に来島したオレイイ環礁の女性で五十七歳であった。その女性も二週間前から病気にかかり、保健夫から点滴をうけていた。ラクプマイの夫はフェイス島出身で、乱暴もので彼女に暴力をふるったりした。彼女は一九四六年に離婚し、夫はフェイスに帰った。数年前にその夫は亡くなったそうである。

ラクプマイが死ぬ前夜、かつて巫女であった老女が、道でラクプマイの夫のアヌウ（死霊）の姿を見たという。それで、巫女はラクプマイのクランで死者が相つぐことを予言した。オレイイの女性の死で、巫女の話したとおりになった。この連続死をサタワルの人びとは、ラクプマイの夫がこの島にいるとき

に、妻のクランにサウサウ（妖術）をかけたからだと嘆いた。彼らの伝統的觀念のもとでは、形のある死霊に出会うと多くの死者がでるし、サウサウをかけられるとクランが根絶すると考えられていた。その災いを防御するため、サウサウを封じこめる呪術的方策をもっていた。しかし、神父が巫女の活動を禁止して以降、彼女はなすすべなく死を見送るよりほか方法がなかったのである。

三つめは幼児の高熱とひきつけの対応についてである。カイヨ夫婦の二歳になる娘が急に高熱を出し、ひきつけを起こした。妻のクランの女性とその子の養母であるカイヨの母をはじめ彼の親族が看病に集まった。養母は子どもを抱きつきり、二、三人の女性は唾や痰をふきとってやり、そのほかの女性は教会での祈りをくり返す日々が続いた。もちろん保健夫はヤップの病院に無線で処法を相談し、治療にあたった。しかし、二週間がすぎてもいっこうに良くならなかった。私はカイヨから日本の薬で直してくれと何度も頼まれた。ぐったりしたままの娘をみた養母は、小さな声で口ずさみはじめた。それは、「早く来てください。かけてきてください。レイ・ソウトゥプのアヌウよ。あなたがたの気持に何か悪いことがあったらお話しください……」といった内容であった。その甲斐があつてか女の子は三日後に一命をとりとめたが、両眼球が中央に寄り、歩行も困難になった。

カイヨ夫婦は、その子の治療のために呼び寄せた船でトラックの病院に出かけた。養母が懇願した「レイ・ソウトゥプ」は、レイが尊称、ソウトゥプは「近い祖先霊」である。このソウトゥプは、アヌウ・フィル（神・好ましい）、つまり「善神」とみなされてきた。したがって、彼女は病気の回復をキリスト教の神ではなく、伝統宗教の「祖霊」にお願したことになる。島の人びとは、その子の病気が善神である祖霊の罰によるもので、リヤ（霊的存在）のせいであるという。カイヨの妻は、タロイモ田

にも行かず家にばかりいては夫に子守りをさせたり、彼をそばから離さず、男の共同労働にも参加させなかった。それをみて祖霊が怒ったのであるという。

けがによる死、相つぐ死、そしてひきつけの原因にたいするサタワルの人びとの対応をみてきた。キリスト教や近代的医療をうけいれながらも、彼らがつい最近まで慣れ親しんできた「民間知識」をも重視していることがうかがえる。その知識の多くは、キリスト教の教えとはあいられないものである。彼らは価値観の深層部において、いまなお伝統宗教に強い執着をもっているようである。

### 生命観

サタワルの人びとは、人が生きているのは何らかの霊的存在とかかわっていると考えている。サタワル語でその霊的存在は、グウンとよばれる。それは形のある実体で、グウンを宿している人間と同じ姿勢をしたものとして語られる。しかし、それを見ることができないのは、呪術・宗教的職能者（巫女・シヤーマン）だけで、ふつうの人はその全体像を知覚できない。一人の人間は一つのグウンをもち、それを宿するのが身体であるという。この身体をさすことばは特定化されておらず、「すべて」とか「みんな」を意味するアノガンがあてられる。したがって、人間（アラマス）は、アノガンとグウンとの二つよりなっているのである。このグウンの訳として「靈魂」の語をあてる。

靈魂は「グウンの家」に住んでおり、その場所のみぞおちのある腹部といわれる。それは身体から遊離し、独自に行動し人間の生活圏だけでなく、別の世界へもゆくことができる。その遊離した状態は異

常な現象で、人間の生命（メナウ）に危機をもたらす。この遊離が長ければ長いほど人間の健康を害し、身体に再帰しないと死にいたると考えられている。そして、一時的な遊離は、生命に衰えをもたらし、病気の原因になり、身体に戻れば病気が治癒する。かつては、靈魂を呼びもどす儀礼が巫女によってとり行われた。これがパッパイ・ロウ（「ココヤシの実の踊り」）である。

巫女は、病人の家の中空に吊りさげる箱を用意させる。一辺一メートルほどのものである。この箱はナーン（「天」）とよばれ、四隅に皮をむいた若いココヤシの実を置く。その実の上部は切りとり、なかの果汁を半分ほど捨てて、布でふたをする。巫女は家の中央に病人をあおむけに寝かせ、その周囲に病人の近親者をすわらせる。近親者は茎のついたタロイモを手にもち、巫女の呪文にあわせてイモで床をたたきながら踊る。踊りが終わるとイモを家の柱のあいだに並べる。このような儀礼をしたあと四日四晩そのままにしておく。五日目の朝に、巫女がナーンのココヤシの布をとりのぞく儀礼をするが、病人の靈魂が戻っていれば、ココヤシの液汁の色が変わる。その儀礼に参加したことのある長老の話によると、液汁が血のように黒赤色になっていたという。

このほかに、巫女は海底下にある死者の国に住む自分の守護靈が憑依して病気の予言をしたりする。守護靈が死者の国である人の靈魂を見たときと伝えると、巫女はその靈魂の顔だちや身体の大きさなどをただし、その靈魂の持ち主をわり出す。それから彼女はその人に呪葉を施し、靈魂をとり返して、病気になるのを防いだりもした。



葉の容器に焼石を入れ、蒸気を吸う病人

## 死にいたる病氣観

人びとは人間の身体に「生氣や元気がなくなる」状態を病氣とみなしている。病氣を意味するセムアイは、セが否定形、ムアイは「生氣」や「力」を示すムァウの一人称の所有形である。直訳すると「(私の身体の) 生氣が失せる」という意味になる。伝統的知識を修得し病氣治療にあたる人は、サウォ・サフエイ(専門知識の修得者・薬)、つまり「薬の専門家」とよばれる。彼は病氣の症状を見てそれに対応する処置を施す。処置の基本は施薬であるが、病氣によっては治療儀礼を行う。この儀礼は病人に薬

を飲ませるとともに、薬の知識を授けてくれた神に呪文を唱えて働きかける内容である。しかし、サウォ・サフエイの治療では直らない病氣は、「悪神に食われている」と判断される。この種の病氣は、人間の生命(メナウ)にかかわると考えられ、その処置はサウォ・サフエイでなく、巫女の手によだねられていた。

「悪神に食われる」という表現は、悪神が病人の靈魂を奪うことを意味する。したがって、巫女は病人の靈魂がその身体から抜け出るのを予防する方策をとる。巫女は、守護靈から病人のために、タリヤク(供え物)をせよとの託宣をうけると、病人の近親者に茎つきのタロイモ、ココヤシ、腰布を用意させる。それが揃うと、近親者を病人を囲むように家の中にすわらせる。近親者は両手にタロイモの茎をもち

巫女の呪文に合わせてイモで床をたたく。一回の呪文がすむごとにイモを柱の間に一列に並べる。四本の柱がイモでつながるまで同じ動作をする。これがすむと、巫女の呪文にしたがい、若いココヤシを二個づつ四本の柱の根元に置く。つぎに、四本の柱に縄を張り、巫女の呪文に合わせて、腰布を一枚ずつかけてゆく。縄にすぎまのないように腰布をかける。また、病人の頭と胸も、腰布で覆う。四日四晩そのままにしておき、五日目にそれを取りはずす。

この儀礼は、タロイモと腰布で家の内側の四面を囲むことから推測されるように、病人の靈魂がその身体から去ることを防ぐためのものである。あるいは、「悪神」が家に入り病人の靈魂を「食う」つまり「奪う」ことを防御するものである。人間の靈魂を奪い、人間を死においやる悪神は、ふつう「近親者」の悪い死霊と考えられている。

## 人間の死

サタワルの人びとは生理学的な死を呼吸の停止とみなしている。人間の息が止まると同時に靈魂は身体から離れる。身体から離脱した靈魂はグウヌウサとなり、それが去った身体はウォー・ナップ、つまり「死体」である。グウヌウサはグウン（靈魂）の人称形のない一般的名称である。離脱したグウヌウサは死者と同じクラン成員のいる島じまをめぐり、そこにいるクランの成員の祖靈に死を知らせる。しかし、それはウォー・ナップを見張るためにその日のうちにサタワルに帰って、ウォー・ナップの頭の側にすわる。その後、死体が納棺されるとグウヌウサはそのなかには入らず棺の横にいる。それには

し、ウォー・ナップはつねに島におり、埋葬されるまでは死者の家に、埋葬後は墓の下に横たわっている。死体が土葬されるのは、ふつう人が死んだ翌日である。ウォー・ナップが地下に埋められてからも、グウヌウサは墓には行かない。死者の家で四日四晩を過したグウヌウサは、五日目の早朝に島を発ち、他界への旅に出る。このとき、多くのアヌウ（祖霊）が迎えに来る。土方久功はグウヌウサが空気のごときもので、埋葬後四晩の間に死者の身体と寸分違わない形に凝結すると述べている<sup>(3)</sup>。

サタワルの人びとは、靈魂が身体から離れることに、異常なほどの警戒心をみせている。それは、靈魂が永久に身体に回帰しないと死にいたるといふ死の観念がその背景にあるからである。

## 死と葬制

調査期間中、私は十一回の葬送の儀礼に参列した。その観察にもとづいて、葬送儀礼の過程を述べることにしよう。

病人は家またはカヌー小屋で多くの近親者に見守られ、看病をうける。病人が男性なら、息子や甥などを集め、彼の持物を誰にやるかを告げる。カヌーは長男に、手斧と斧は次男に、そして彼が贈与したココヤシ林とパンノキは息子たちすべてが使用するように。女性の場合は、姉妹や娘をよんで、自分のタロイモ田を分け、腰帯は長女に、ウコン粉は次女にというように相続させる。いわゆる、遺言を言わたすのである。

病人が息をひきとると、つきそっていた女性は死体にすがりつき、死者の名を呼び、「私をおいて行

ってしまふのかよお」とか「戻ってこい」と叫ぶ。やがて、その叫びは大きな泣き声に変わり、女たちは嘆き悲しみの表情をあらわにする。この狂ったような女たちの大声は、死にゆく靈魂を蘇生させようとする呼びかけで「魂呼び」とみなせよう。その泣き声で島の人びとは死人がでたことを知り、女性たちは腰布を手に死者の家へ駆けつけ、号泣にくわわる。この腰布は死体を包むもので、すべてのクランから贈られる。そのうちに、泣き声もおさまり、葬歌を合唱する。その歌は二時間ほどで小休止となる。死体は新しいマットに、頭を西向きにしあお向けに横たえられる。死者の妻や娘たちが死体を水できれいにふき、頭髮を整え、眉間、鼻、こめかみ、肩、みぞおちにウコン粉を塗る。そのあと身体全体にもその粉をつける。頭には櫛や花輪、首飾りをつけ、身につける腰布(褌)も真新しいものにとりかえる。それが終ると、腰から足首のあいだを二ヶ所、頭髮でなった紐で縛る。足もとには、死者が使用していた手提げ、物入れ、ゴザなどを置く。死体は女性が処置する。死者が女性や幼児ならなにもタブーがない。それが男性の場合、彼の女性キョウダイが死体にふれてはならない。死の装束をつけるのは、妻やその娘、姪たちである。

その夜、死者およびその配偶者のクラン成員やアフアクルたちは、死者の家に集まる。家のなかに入るのにはおもに女性である。男性と参集した人びとは家の周囲に腰を下ろす。死体のまわりにいる女たちは、歌を合唱しては、腹をしめつけられるような声で号泣する。この歌と号泣は夜どおしつづく。その歌は、アルウォルウ・ニ・マニ・マーとよばれ、直訳すると「死者のために泣かせる」という意味で、葬歌にあたる。サタワルの人びとは、それを「死者に何かをしてやる」とか「死者に申しわけない気持ちを表わす」ための歌と説明する。

葬歌の歌詞は多様で、死者を失う人びとの悲しみを悼む歌、死者の靈魂をなだめる歌などとともに死者の祖先が島に来たときの歌、クランの偉大な航海者を讃える歌や死者が生前につくった歌などがある。この葬歌の歌い手は死者の近親者だけでなく、島の女たちが組をつくって参加する。彼女たちは死者の家に立ち替り入って、死体の側にすわり合唱と号哭をくり返す。家には三十人もの人が入る。頭飾りの花や草の芳香、ウコンの香り、人びとの身体につけたココヤシの油のにおいがまざり合い鼻を刺激する。この葬歌と号泣がくり返されるだけの「通夜」は、人びとが遺体と空間をともし、死にたいする悲嘆を表現する儀礼である。歌われる葬歌の内容から、死者をあの世へ送る歌であり、とくに死者の靈魂が祖先の仲間にくわわることを祈願することが通夜の主題になっている。

#### 葬送と埋葬

翌朝、男たちは、カヌー小屋で棺づくりをし、墓地に棺を納める穴を掘る。今はベニヤ板で棺をつくるが、以前は古いカヌーが使われた。死者の家では女たちが葬歌を絶やさずに歌いつづける。棺ができあがり、死者の家に運ばれると、死体を棺に移す。そのとき、女性たちは一段と高い声で泣き叫ぶ。近親の女たちは、死者の顔に頬をつけ、額をなで、その身体を手でさすったりする。また手で追い払うようなしぐさをして、「早くあの世で安住せよ」とか「もう二度と島へ戻るな」などと死者をさとすようにつぶやいては嗚咽にむせぶ。棺の底にはタコノキのマット、その上に五十枚ほどの腰布が敷かれている。死体が入られると、その上にも三十枚ほどの腰布がかぶせられる。腰布は多いほどよく、腰布で包まれない死体の靈魂は悪神になると信じられている。それから、マットで全体をおおいココヤシの紐



教会への葬列

で縛る。足もとに物入れなどを入れたあと、棺のふたをする。納棺がすむと、島の酋長は死者の生前の行いを讃える話をする。それから死者の名前を印した十字の墓標を先頭に、棺をかついで行列をつくって教会までゆく。一時間ほどのミサをあげ、教会での礼拝をすませる。

現在、島全体の共同墓地があるけれども、従来克蘭ごとの墓や家の側に埋葬する遺族もいる。教会での礼拝がすむと、棺を墓地へ運ぶ。墓地では助祭がミサを行い、参列者が賛美歌を歌ってから、地中に棺をおく。棺といっしょに死者が使っていた食器、バケツなどの容器類、山刀、女性なら機織り具、男性なら漁具なども埋められる。それから、参列者が穴に花を投げ入れ終ると土をかける。墓には白い砂が一面に撒かれる。この埋葬が終ると、死者の克蘭では参列者をはじめ、島の成人にタバコを分配する。

これはパウンナ・リキリキ（感謝の手）とよばれ、以前には食事がふるまわれた。この分配が終わると死者の親族以外のものは墓を去る。

死者の近親者は、埋葬後、墓で頭髮を切り落す。それから四日四晩、彼らは朝と夕方墓のそばに来てすわる。また、死者の配偶者や同性キョウダイ、娘や息子など二、三人が白い布をかぶって死者の家に留まる。彼らは食べて寝るだけであるが、もし外に出るときでも、常時一人は家に残るようにする。こ



頭髪をそり死者を弔う

これは死者のグウヌウサが、死体から離れても四日四晩は、家に滞在していると考えられているからである。靈魂のいる家に遺族が留まり、布をかぶる行為は、マラボン・ニ・マ（「死者のかぶりもの」とよばれ、「グウヌウサといっしょにいる」ためのものである）。

埋葬の翌日、酋長は男たちに十個のココヤシをとるように指示する。男たちが供出したヤシのうち、四個ずつがすべての成人女性に分配され、残りは死者の家に贈られる。そのつぎの日には、女性が一人一皿の料理を死者の家に届ける。その食べものは死者のリニージの女性長が、一部をとったあと、島全体のリニージに分配する。

この死者の家へのココヤシと食べものの贈与は、「死者の家の人の世話」とみなされる。埋葬から五日目の早朝には、死者の家のそばで大きな火がたかれる。これがフィラオラオとよばれる「死者がすわっていたものを焼く」儀礼である。

フィラオラオでは、死者の家にあるマット類、蚊帳、毛布、掛け布、枕から家の壁、ときには家そのものに火をつける。これには死者のかぶりものをしていた人びと、墓へ四日出向いた人びと、死者の居住地（プコス）のすべての住人がくわわる。そのあとで、死者が女性ならば、女たちはタロイモ田へ行き、彼女が植えたタロイモはすべて引き抜く。彼女が除草した枯草や枯葉があれば、その田で燃やす。男性なら、男たちは彼が下刈りしたココヤ

シ林やパンノキの下の枯木などを焼いてしまふ。この死者が生前に関与したものをすべて、灰にしてしまふのは、「死者にたいする悲しみを忘れる」ことにあるという。また、死者の「靈魂が帰ってくるのを恐れるため」だとも語られる。それは死者の生前の足跡をすべてこの世から消し去ることを意味している。サタワルの人びとは、死者の靈魂が「悪神」となつて島にまい戻ってくるのをこのうえなく「恐ろしい」(メサック) ことと考えている。たとえば、死者の名前を口にするを「死んだ人の上に名を呼ぶ」といい、忌避している。フィラオラオはグヌウサをあの世へ送り出すための「火」だという。したがって、その儀礼は「魂送り」とみなせよう。

#### 服喪と禁忌

埋葬後、人びとには四日間のエピヌ・エガン「仕事の禁忌」が課せられる。男性にとつての禁忌は、木を切り倒し、カヌーや家をつくること、家の屋根替え、ココヤシの繊維で紐をなうことなどがある。女性のそれは糸つむぎ、機織り、マットやカゴ編みなどである。それら仕事の禁忌は、新しく物を建造したり、製作することの禁止である。死者の近親者(四日間墓地へ行った人とかぶりものをつけた人)は、その禁忌を一ヶ月間守らなければならない。死者とその配偶者のクランでは、四日間料理づくりが禁止となるが、それ以外の人びとはタロイモの収穫、ココヤシやパン果の採取、ヤシの液汁採集、魚とりを自由に行える。

酋長クランの成員の死亡時には、そのほかにいくつかの行為が禁忌になる。死者の家の近くの木に登ること、その周囲で大声を出したり、歌をうたうこと、肩の上や手を提げて物を運ぶことなどである。

それらの禁忌は四日間守られる。酋長は、特定の海域に棒を立てて禁漁区に指定する。この禁止は数ヶ月におよび、その解禁日には共同漁を実施し、漁獲物を島の人びとに分配する。酋長クラン成員の死後、六ヶ月めくらいに大量のタロイモの集積と再分配の儀礼が実施される。これがファリックである。それについては8章でくわしく述べることにする。

## 死霊の世界

人間の霊魂グゥンは、死を契機にグヌウサになる。グヌウサは生命体としての人間の身体から抜け出て、永久に戻らない存在であることから、死者の霊、つまり「死霊」といえよう。埋葬後の五日めに行われるフィラオラオと同時に、死霊は「天国」に向うと信じられている。そこはウェイ・ナンとよばれ、ウェイが「の上」、ナンが「天空」をそれぞれ意味することから、「天空の上」にある他界、つまり「天上世界」である。

人びとは、死霊の旅立ちについて、つぎのように話す。

天上世界には、善神（アヌウ・フィル）が住んでいる。そこへ到達するには「天空への道」がある。善神はその道を通して、死霊を迎えるために地上に降りてくる。死霊は善神に導かれて天上世界へ昇ってゆく。そのとき、死霊にたいし多くの悪神（アヌウ・プウット）が呼びかけてくる。善神は死霊に「答えるな。横やうしろを振り向くな。自分の道だけを見よ」と教える。その教えに従えば死霊は天上世界へたどりつける。しかし、悪神の呼びかけに答えると、死霊は悪神の住む世界に留まる。

善神が住む天上世界には、地上と同じようにカヌー小屋をはじめ村、ココヤシ林、タロイモ田や海もある。地上と大きく異なるのは、食料資源に恵まれ、生のまま食べれること、争いごとがなく、嵐の襲撃といったこともない。そのため、善神たちはあくせく働くこともなく、踊りや歌をうたって暮すことができる。サタワルの人びとにとって、天上世界はこの世のレプリカとして位置づけられており、生者のいるこの世を理想化した世界としてイメージされているようである。その世界を統べるのはアヌ・ナップ（「大神」とヌーカイナン（「天空の中央神」）である。前者は年老いた男神で、創造神と考えられている。後者は日本の神にたとえるなら「天の御中主神」であり、かつては航海や占いの儀礼のさいに勧請されたり、人びとの祈願の対象になっていた。けれども、人間の死霊がなる善神とそれら二神との関係はあきらかでない。

天上世界にたいし、悪神が住む世界は特定の名称があたえられていない。その世界は、多種多様な苦難がまちかまえている「地獄」のイメージで語られることはない。悪神のもとに留まった死霊は、生者の住む島にまい戻り、森と村の双方を徘徊する。島での死霊の住みかには木の穴や木の下、岩の穴などである。サタワルの人びとは、森にはアヌ・ワネワン（「森の神」）がおり、それを悪神とみなしている。この神に「食われた」人間の靈魂は「森の神」になるという。したがって、天上世界へ昇天できなかつた死霊は島に戻って森をすみかとしているとも解釈できる。それら二世界のほかに、善神と悪神とが共存する他界がある。それがファニ・ノン（「海底下の世界」）である。そこには、ファネ・サット（「海の下」）という名のカヌー小屋があり、悪神の住むところである。善神は悪神と分かれて住むが、その住みかには名前はない。その世界はサウオ・ノン（「海底の知患者」）によって治められている。

海底下世界の悪神は、アヌウ・サット（「海の神」）と総称される。海の悪神は、人間の住む地上世界に出没し、悪事をはたらく。とくに、人間の靈魂を奪い、病気にしたり、狂気にしたりする。この神に靈魂をとられて死んだ人間の死靈は、海底下の世界に住み、悪神になる。海の悪神が女性の靈魂をとるときは、それを妻にするためである。海の悪神の妻となった女性の死靈は天国へ行かず、悪神となって、島へ災いをふりかけるためにやってくる。

海底下世界にはその悪神とともに、善神もいる。善神はシャーマンの守護靈でシャーマンの娘とか近親者の死靈である。とくに、幼死した子どもの死靈の場合が多い。その幼児の死靈は生前の個人名でよばれる。幼死した子どもの靈は、天上世界に行くと十日か二十日で立派な男や女になり、そこに住むと一般には信じられている。しかし、シャーマンの守護靈となる幼児の死靈だけが、天上世界で大人の死靈に変移してから海底世界へと下降してゆくのである。その靈は海底世界にいる悪神たちが生者におよぼす災いを、シャーマンに伝え、それに対抗する方策をシャーマンに教える役目をおっている。

これまでにみてきたように、サタワルの他界は、天上世界、地上（森）世界と海底世界の三層よりなっている。この三層構造は、東南アジア島嶼部からオセアニアの島じまにみられる空・地・海の世界区分に通ずるものである。しかし、サタワルの人びとはもう一つの他界の存在を語る。それは島の「南にある島」で、アユルとよばれる。アユルは入江の多い島で、天上世界と同様、食べものの豊かな理想郷とイメージされている。その理想郷を支配する神は、パンノキの神でネサウルマルとよばれる男神である。彼はパンノキの豊穡に責任をもつと同時に、あらゆる薬に関する知識をもっている。南の理想郷へゆく死靈は、サウオ・マリー（「パン果の知識修得者」）の靈魂とされる。一九七八年に亡くなったその

みが住んでいると信じられているのである。その世界は、特定のクランの知識者の死霊の住みかであるが、人びとにパンノキの豊穡、病気の治療や争いごとの解決など多くの福因を授けてくれるところである(図8)。

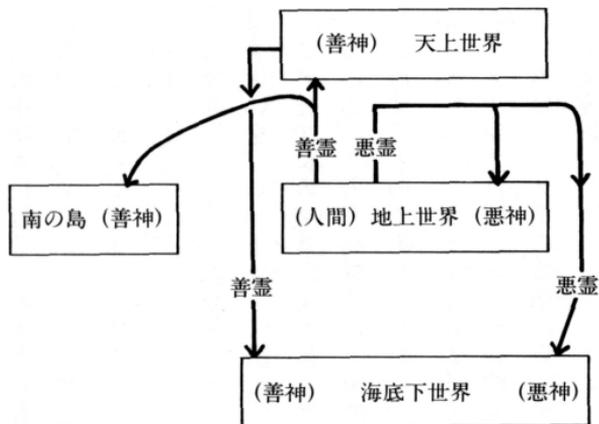


図8 死霊のゆくえと世界観

修得者の妻は、夫が死ぬ四日前に海で水浴びをしていると、いろいろの種類の流木が彼女の身体にまつわりついてきたと話していた。また、彼女の家の上を島にはいない極彩色の羽根をした鳥が舞っていたとも言う。彼女はそれらがアウルから夫を迎えにきた「使者」であったと教えてくれた。

パンノキに責任をもつサウオ・マリーは特定のクランから輩出される。そのクランの成員の死霊のなかには、そのアウルへ行くものもある。その死霊はアウルにいる女神や男神と結婚し、善神になる。二十年前に亡くなった女性シャーマンはアウルに住む善神を守護霊にし、そのお告げを人びとに伝えていた。彼女が死んだときにも、美しい鳥が迎えに来たという。このように、アウルという他界にはパンノキの知識修得者やそのクラン成員の死霊が行き、善神となつて悪神のわるさに対抗する神がある。

## 死霊とアヌウ

これまでに、アヌウのことで示される神がみがいつか登場した。天上世界にいる最高神から、パノノキの神、海の神、さらには死霊のうちアヌウ・フィル（「善神」）とアヌウ・プウット（「悪神」）になるものまで多彩である。サタワル語で超人間的ないし超自然的存在はすべてアヌウの一語で表わされる。航海の神、雷神、森の神、祖霊、妖怪、そしてシャーマンもアヌウとよばれる。

サタワルの人びとは、多くの神がみとのかかわりのなかで、生活に大きな影響をおよぼすのは人間起源の神と考えている。その神が人間の死霊（グウヌウサ）である。死霊のなかには、生者に災いをもたらす神とその災いをとり除く神とがいる。前者が「好ましくない神」アヌウ・プウットで、別名アヌウ・ンガウ（「悪神」）とよばれる。後者が「好ましい神」アヌウ・フィルで、アヌウ・カッチ（「善神」）ともいわれる。死霊が善神になるか、あるいは悪神となり人びとの前に姿を現わすかといったことは人びとの大きな関心事である。

サタワル社会には、死霊が善神になるか悪神になるかを判断する基準がもうけられている。それは人間の生前の行為と死にざまが目安となる。生前に社会的規範を遵守したか否かによる。近親相姦を犯した人、他人の物や妻を盗んだ人、人を傷つけた人、妖術をしかけた人などの死霊は、天上世界へ行けず悪神になると信じられている。死にかたについては、漂流ないし水死して死体があがらなかった人、木から落ちたり、サメなどに襲われて死んだ人、自殺者、そして悪神に「食われて」亡くなった人の死霊は、悪神のもとに行き、そこに住みつづける。とくに、腰布で包まれない死にかたは、もっとも悪いと

考えられている。サタワルの人びとは、島を旅立つときには他所で死ぬときのことを想定し、数枚の腰布を持参するし、その腰布を遠洋航海に出る人に「餞別」として贈る。

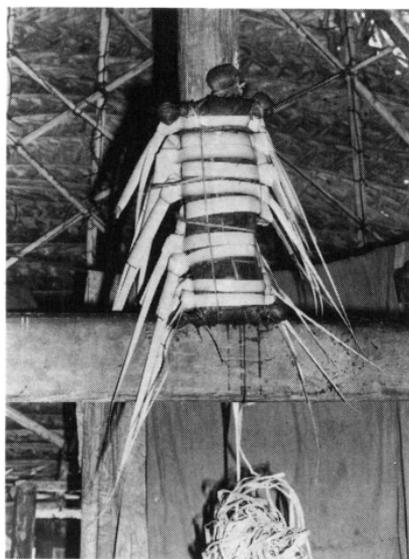
悪神に食われて死ぬということは、前にもふれたように、悪神に生者の靈魂（グウン）を奪われることを意味する。生者が靈魂を奪われるとかならず病気になる。その靈魂をとり戻せないと死にいたる。その人の死霊もまた悪神となり、生者に悪事をはたらくために地上に出没する。土方は、ヤヌウ・プットに靈魂をさらわれ、病気になったり、死亡した人の霊を数多く報告している。たとえば、出産後ある女は、お腹に森の悪神が入り、彼女の靈魂をとっていかれて死んだ。その死霊は森に留まり、悪神となって何度か生者のもとに現れ、生者を病気にした。また、海の悪神がある女性を妻にすると行って彼女の靈魂を海底の世界へ連れていったために彼女は死んだ。彼女はその妻となって、つまり悪神となって海底世界に住み、島に出没し、何人かを病気にしたというものである。

ある人の死霊が悪神になったことを人びとが知るのは、それがこの世に再来し災いをもたらすからである。そのことは、シャーマンに憑く守護霊（善神）のお告げによって人びとに知らされる。つまり、人びとは特定の死霊が望まざる神となったことを、それが島にまい戻り生者に悪事をはたらくことよってはじめて確認するのである。人びとは悪神を封じこめ、地上に出現させないための方策を試みる。それが、シャーマンの施す呪薬と呪文による悪神払いの儀礼である。個々の悪霊はこの封じこめによって出没しなくなると人びとから忘れ去られ、悪神（アヌウ・サット、アヌウ・ネーワン）の集合体に包括される。それによつて、この世にいつさい現われぬ一般の死霊は、すべて善神とみなされる。したがって、善神となるのは、シャーマンの守護霊をのぞけば、ふたたび生者のまえに姿をみせない、名も

なき死霊ということになる。人びとはそのような善神をアヌウ・ソウトゥプとよんでいる。

アヌウ・ソウトゥプは、「隠れた人の神」ほどの意味で、「祖霊」とみなすことができる。サタワルの人びとは、アヌウ・ソウトゥプを生前にごく親しくつきあった人、つまり、父・母・祖父・祖母・キョウダイなどの死霊とみなしている。その祖霊はクランの人びとの行動を天上世界で見張っている。たとえば女性が男性キョウダイに表敬行動をしているか、彼女たちが婚出したクランの男性に食べものを贈っているか、男性が兄の妻と姦通していないか、また彼がタロイモ田などの財を勝手に子どもに分与していないかなどについてである。この社会的規範を破る成員がいると、祖霊は「罰」をあたえるという。その罰は違反した本人だけでなく、クラン成員の誰かに下される。おもに病気の罪である。この制裁の原因はシャーマンに頼らずともわかる。クラン成員が病気になるはず、近々に社会的規範を守らなかつた人の有無が問われるからである。この制裁がリヤである。前章まででたびたびふれたリヤの観念というのは、祖霊が社会関係の規則を守らなかつた生者にあたえる罰のことである。

祖霊が生者の行動を見張ると述べたが、人びとは実際には地上（墓地）に横たわっているウォー・ナツプ（死者の骸）がその任にあたっていると考えている。ウォー・ナツプは地上にいてクランの人びとの行動の評定をしているのである。祖霊がときどき地上に降りてきて家の棟束に鎮座し、ウォー・ナツプに人びとの行動の様子を聞く。もし、違反者がいれば罰を出す。また、人びとが墓地にココヤシを供物として長いことあげなかつたりすると、ウォー・ナツプは祖霊が来たときに、「ソウトゥプ、皆が私に食べものをくれないのでひもじくて仕方がない」と告げる。すると祖霊はクランの誰かを病気にするのである。



棟束に人形の薬をしぼりつけ、病気の回復を祈る

霊よ、どうぞこの食べものを召しあがって下さい」と唱えて、魚や料理の一部を天上に投げあげる。また、クラン成員が規範を破って病気になったと考えられるときにも、家の棟束や墓地にココヤシやタロイモなどを供物としてあげ、祖霊の「気持をなだめる」呪文をとなえたりする。

それになりたいし、祖霊のなかでもシャーマンの守護霊は、人びとの不運や災いを取り除いてくれる存在、つまり善神と考えられている。その祖霊は個性があり、生前の名前でよばれる。人びとは災いをうけたマイナスの状態を回復させ、元の状態に戻すために、人間の側からその祖霊に積極的に近づく。その方法はシャーマンにその祖霊を憑依させ、その託宣によって生活を平常な状態に復帰させるものである。

これまでに述べたように、サタワルの人びとの神（祖霊）とのつきあいは、「疎遠であることを良し」とする観念が強くみられる。人間の期待に反し、この世に出現し、生者のまえに姿を見せる神は、

サタワルの人びとは、近親者の死霊のうち善神と考えているものをソウトップとよぶ。しかし、ソウトップを個性のある存在とはみなしておらず、「集合霊」と位置づけている。その祖霊に日頃から積極的に働きかけ、何らかの願いをかなえてもらうこともない。ただ、カヌーで航海に出るとき、航海者は墓地にココヤシを供物として捧げ、無事の帰島を祈願する。航海から帰ったときにも、乗組員は祖霊に感謝する共食儀礼を行う。そのさいに航海者が「祖



復興するカヌーの進水儀礼

概して人間に災いをもたらす存在で、悪神と位置づけられる。特定の個性ある祖霊を別にすれば、住むべき世界に安住している祖霊は、一般に善神と観念されている。悪神の害力に対抗し、平常な状態を回復させる個性をもつ祖霊がシャーマンの守護霊である。したがって、サタワルの善神は、「消極的善神」としての名もなき祖霊と「積極的善神」としての個性のある祖霊とに二分することができる。

現在のサタワルの人びとはキリスト教の神と伝統的神がみとを宗教生活においてどのように位置づけているのであろうか。最後に、一つの話題を紹介して本章を終えることにしよう。

一九七九年十月に私は百キロ離れたエラート島へカヌーで航海した。第1章に登場したナティクが孫の病気見舞に出かけるカヌーに同乗したのである。彼女の孫と甥五人でクルーを組み、その島へ行く用事のあった一人の長老がくわわった。航海の指揮は彼女の甥、ルモイ。ルモイは、高名な航海者ルッパンの息子。彼は三十歳の若者で、次世代をになう航海者として信頼があつい。朝七時に島を離れたが風がなく、夕方になっても後方にサタワルが見えた。朝、昼、夕とナティクと全乗員が十字架を手にミサをしたにもかかわらず風はいっこうに吹かなかった。日が沈むころ、長老がココヤシの葉で風車をつくり、帆網につけ真剣な顔で呪文を唱えた。それは、「風



ホラ貝を吹き嵐を追いやる

の神」に順風を送るように祈願する伝統的なやりかたである。それから、かなりの風が吹きカヌーの速力は上がった。

夜二時ころ、われわれの目指す方向に黒い雨雲がわき、しばらくすると全天をおおってしまった。星や月が見えなくなると心ぼそくなるものである。風が強まり、雨と波しぶきで全身ずぶ濡れ。海も荒れ、ルモイは帆を降ろしカヌーを漂流させた。ナティクは荷台のおおいから顔を出して、大きな嵐でないと私を慰める。しかし、私は心のなかでカヌーに乗ったことを後悔していた。三時間もたったころ、長老が風の方に向き、口に手をあて呪文を大声で唱えだした。声を高めるとき若者にホラ貝を吹かせた。激しい雨にうたれ、長老はホラ貝の尻の方を嵐に向けてつき刺すようなしぐさをして懸命に呪文をあげている。その悲壮な顔つきを見て、私の不安はつのるばかりであった。三十分もその動作をつづけていたが、明け方には雨も小やみになった。ルモイはうねりを頼りに針路をわりだし、カヌーを進めた。

その長老は「キリストの神は海の上では何も助けてくれない。サタワルの航海の神の方が強いよ」と語っていた。キリスト教の絶対神も彼らの信仰のなかでは、伝統宗教の神がみの一員としての位置づけしかないことを、私は実感したものである。